

博 多 III

——第17・20・21・22次調査の概要——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第118集

1985

福岡市教育委員会

卷首図版 第17次調査 下層方形周溝墓SX200（南東から）



博 多 III

——第17・20・21・22次調査の概要——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第118集

1985

福岡市教育委員会

序

現在福岡都市圏の中核として躍進する博多は、また古代～中世においては日本の対外交渉の拠点として繁栄した都市でもあります。

こんにち高層ビル化がすむなかで縦統的に発掘調査がすすめられ、地中に埋没している古代～中世の「博多」の姿がしだいに明らかになりつつあります。

本書に概要を収めた17・20～22次調査は、おもに博多中心部から南寄りにかけての地域を対象としたものです。中世都市「博多」に関連する数多くの遺構・遺物のほかに、さらに時代を遡って弥生・古墳・奈良時代のものも検出され、福岡平野の歴史を考えるうえで貴重な資料をうることができました。

本書が調査・研究の場で活用されるとともに、埋蔵文化財保護への一助となれば幸いです。

発掘調査にあたり、ご指導・ご助言を与えられた諸先生、関係各位、また心よくご協力を賜わった地権者、工事関係者各位に深甚なる謝意を表します。

昭和60年3月1日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例 言

- 1 本書は、福岡市教育委員会が1981・83年度に実施した博多遺跡群第17・20・21・22次調査の概要である。
- 2 本書の執筆はつぎのとおりである。

I	柳沢一男
II	//
III	杉山富雄
IV	//
付編	吉岡完祐
- 3 本書に掲載する遺構実測図は、柳沢・杉山・吉岡のほか、塩屋勝利（現・福岡市歴史資料館）、渡辺和子（現・筑紫野市教育委員会）が作成した。
- 4 遺物実測図は、柳沢・杉山・吉岡・渡辺のほか、藤尾慎一郎・川村浩司・今津啓子・郭鍾皓（九州大学）、野村俊之が作成した。
- 5 本書に掲載する写真は、柳沢・杉山・上方高弘が撮影し、上方が焼付を行った。
- 6 本書で用いる方位は磁針方位である。
- 7 本書の図集は柳沢・杉山が行った。

本文目次

I	はじめに	1
II	第17・20次調査の概要	4
III	第22次調査の概要	25
IV	第21次調査の概要	43
付編 博多遺跡群出土の朝鮮陶磁器		47

挿図目次

Fig. 1	博多遺跡群空中写真	2
2	調査区位置図(1:6000)	3
3	17次調査区位置図(1:80)	4
4	17次調査区位置図(1:1000)	5
5	弥生後期の住居址	6
6	弥生時代遺構分布図(1:300)	7
7	S B164・S K153出土碧玉剣片	8
8	S K153(東から)	8
9	S B164実測図	8
10	S K153出土土器実測図(1:5)	9
11	S D159・161(東から)	10
12	古墳・奈良時代遺構分布図(1:200)	11
13	古墳・奈良時代および中世下層遺構全景(南東から)	12
14	S X200	13
15	木棺出土鉄器(1:3)	14
16	周溝出土土器実測図(1:4)	14
17	瓦質土器実測図(1:4)	15
18	後期の集落	16
19	出土遺物実測図	17
20	中世遺構分布図(1:200)	19
21	中世上層遺構全景(南東から)	20
22	溝	21
23	井戸	22
24	土塁	23
25	17次調査出土銅鏡(1:2)	24
26	22次及び周辺調査区(1:2000)	25

Fig.27 土層図(北壁、南壁)	1 : 200	26
28 VI層面・Y層面の遺構(SW区)東から		26
29 529号墳墓(南から)		27
30 754号溝(東から)		27
31 667号溝(南から)		27
32 V層面の遺構(1 : 100)		28・29
33 814号井戸出土遺物(1 : 3)		30
34 814号井戸(北から)		30
35 22次調査出土斧		30
36 IV層面の遺構(東から)		31
37 IV層面の遺構(1 : 100)		32・33
38 699号・703号土塙出土遺物(1 : 3)		34
39 IVb3層下の状況(1 : 200)		34
40 IV層の遺構(東から)		35
41 359号土塙遺物出土状況(東から)		35
42 IV層の遺構(1 : 100)		36・37
43 357号土塙(南から)		38
44 357号出土遺物(1 : 3)		38
45 364号建物(1 : 80)		39
46 III層面の遺構(北から)		39
47 III層面の遺構(1 : 100)		40
48 901号・301号溝(南から)		41
49 309号土塙遺物出土状況(1 : 40)		41
50 342号土塙遺物出土状況(1 : 30)		42
51 342号土塙出土遺物(1 : 3)		42
52 21次調査区(1 : 600)		43
53 21次調査区全景(II面の遺構)南から		43
54 21次調査区の遺構(1 : 100)		44
55 42号土塙(東から)		45
56 21次調査区出土遺物(1 : 3・1 : 5)		45
57 I面の遺構(南から)		46
58 溝(37・34・51・12・13号)東から		46
59 遺構(溝)模式図		46
60 朝鮮陶磁器火窯図I(1 : 3)		54
61 ハ II(1 : 3)		55
62 ハ III(1 : 3)		56
63 朝鮮陶磁器I		57
64 ハ II		58

I. はじめに

博多遺跡群は福岡平野の中央北端、博多湾に面した高層ビル街の地下に埋没し、約120万m²の宏々たる範囲に亘る遺跡である。遺跡は那珂・御笠川にはさまれた河口の砂丘上に営まれている。

この一帯が古代末から現代に継続する「博多」であること、また各種の工事とともにあって弥生時代中期の壇棺をはじめ、古代～中世にわたる各種の遺物が出土していることは衆知の事実であった。しかし、遺跡上がほとんど市街地として開発つくされていることもあって、考古学的な発掘調査は実施されたことがなかった。この遺跡について行政的に対応するようになったのは、実に福岡市が建設した地下鉄の工事に伴う事前調査（1977～79年）を鏑矢とする。

爾來、ビル・マンション・寺社などの建設あるいは建築工事に伴い事前調査を実施している。これまで25次におよび、遂次その成果が公表されている。

さて、本書に概要を収めた博多遺跡群の17・20・21・22次調査は、各地点ともビル建設の申請が提出され、建設工事に先立って実施された事前調査である。各調査地点の地籍・面積等はつぎにしめすとおりである。

	調査区所在地	調査対象面積	調査面積	調査期間
17次	福岡市博多区駅前1丁目97	1425m ²	910m ²	1981. 11. 6 ~ 82. 2. 2
20次	月 月 月 98	1425.88m ²	980m ²	1983. 3. 19 ~ 7. 16
21次	月 月 駅前2目181他	220m ²	150m ²	1983. 5. 7 ~ 6. 20
22次	月 月 冷泉町189他	1250m ²	840m ²	1983. 9. 1 ~ 84. 2. 29

調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会

ノ 総括 文化課長 甲能貞行（前任）、生田征生

埋蔵文化財第2係長 柳田純季（前任）、折尾 学

ノ 序 文化財第1係 古藤国雄・岡崎洋一・松延好文

禁制酒布 埋蔵文化財第2係 塚原勝利・棚沢一男(17次)

柳沢一男・杉山富雄（20～22次）

久 捕助 渡辺和子(17次) 吉岡実施(20・22次)

数据辅助

学)、渡辺和子(筑紫野市教育委員会)、朴美子(奈良県立橿原考古学研究所)、野村俊之



Fig. 1 博多遺跡群空中写真



Fig. 2 調査区位置図(1:6000)

II. 第17・20次調査の概要

17・20次調査地点は、宏大な博多遺跡群の中央部南辺に近く、遺跡基盤砂丘の高まりからゆるく南に下降する斜面に位置する。

調査地点一帯は昭和38年に現在地に移転した博多駅の旧駅敷地にあたる。そのため駅舎関係の搅乱が予想されたが、比較的少なく一部を除いて遺構の保存状況は良好であった。しかし遺跡の基盤となる砂丘がもっとも高い20次調査区の北半部では削平が著しく、搅乱層下に直接砂丘が露出する状況であった。

検出した遺構は弥生後期以降、古墳、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸前半にいたる各期にわたる。出土土器には夜臼式、弥生中期もあるが、該期の遺構はみとめられなかった。遺構がもっとも多いのは鎌倉～室町にいたる中世都市博多に関連するものである。当初中世堆積層の層位的な発掘調査を目指したが、後述するように、中世堆積層中にキーとなる遺構面を確認しえず、結局奈良期包含層上面で中世遺構の検出を行わざるを得なかった。

奈良時代および以前の遺構は、中世遺構の調査後、包含層を振り下げ検出した。しかし、中世の溝・井・手塚など規模が大きく掘り込みの深い遺構によって破壊されているばかりがあり、獨立柱建物の復原が困難となっている。とまれ、これまで25次にわたる博多遺跡群のなかで、本調査地点は弥生～奈良時代遺構がもっとも良好な状態で検出され、中世以前の豊かな博多遺跡の内容の一端を知りえたといえる。

層序

現地表の標高は約4.6m、北から南にむかってゆるく下降している。

地表下の土層堆積状況は、17次調査地点をとっていえば、大まかに5層に分離される。

- ①旧博多駅建設（明治22年）に伴う整地層と以降の搅乱層
- ②江戸期を中心とする遺物包含層（度重なる搅乱、整地によって形成されたと思われ、きわめて複雑）
- ③中世の遺物を含む黒褐色粘質土層。遺構の重複が著しく、キーとなる遺構面（整地層）の拡がりがみとめられない
- ④淡茶褐色～灰褐色砂層。奈良期を最新とする包含層
- ⑤黒色砂層で古墳時代前～中期の包含層
- ⑥基盤砂丘（灰白～白色砂）である。基盤砂丘はもっとも高い20次調査地点で標高3.8m、低い17次調査地点で2.5mをはかる。

II4.70m

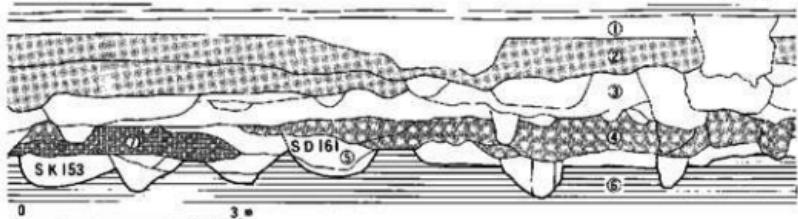


Fig. 3 17次調査区層位図(1:80)

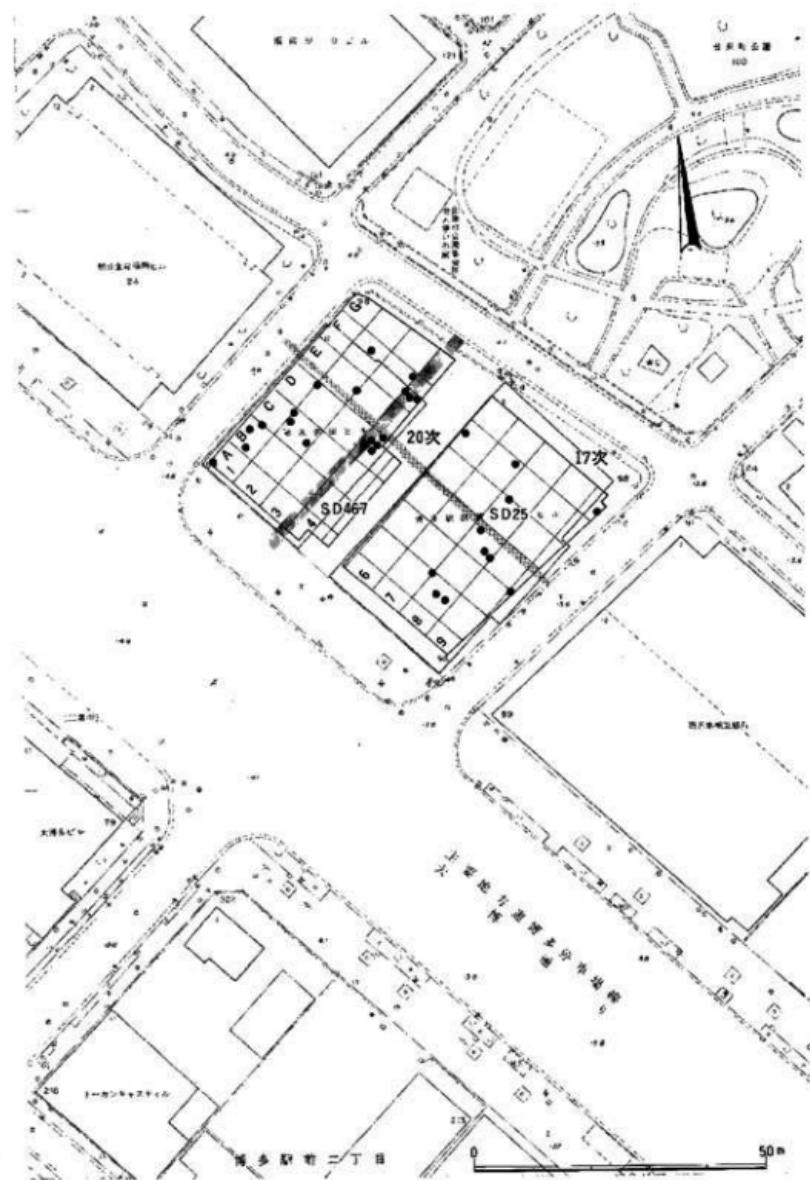


Fig. 4 17次調査区位置図(1:1000) ドットは井戸をしめす

1) 弥生時代の遺構と遺物

遺構に伴わない弥生土器は、調査区全域から出土した。もっとも遅るものに夜白式土器がある。おそらく博多遺跡群では初例であろう。ついで中期初頭の土器もあるがこの段階までは、これまで遺構検出例がない。

弥生時代に属する遺構としては、住居址と土塙がある。

竪穴住居址は17次調査2棟、20次調査1棟の計3棟が検出されているが、もちろん後出の大形遺構によって破壊・消滅したものも予想される。他に掘立柱建物も予想されるが検討していない。竪穴住居はすべて方形・長方形プランである。3棟のうち規模のわかるものはS B164の一例のみで、他はいずれも調査区ぎわであったり、後出遺構に一部を破壊されている。弥生後期後半～末葉に属するが、出土遺物の検討を行っていないため、細かな年代比定にいたっていない。

出土遺物のうち注意を要するのは、S B164の南東隅の床面近くからまとまって出土した碧玉の剥片である。他に土塙SK153からも大形の剥片が出土しており、後期末葉に碧玉を使用した玉造りが行われたと推測される。この中に未製品はみあたらないが、後出の中世柱穴から方柱状に面取りした管玉未製品が出土している。

土塙は17次調査で4基検出された。いずれも後期後葉～末葉の土器が出土し、住居址と併行する時期のものである。

そのうちの一つ、SK153は調査区中央の西端にある。調査区ぎわに検出されたため全体を発掘しえなかったが、叙上の碧玉大形剥片とともに多量の土器が出土した。そのなかに山陰系器台を模倣した在地の土器があり、彼我の併行関係を知ることができる。

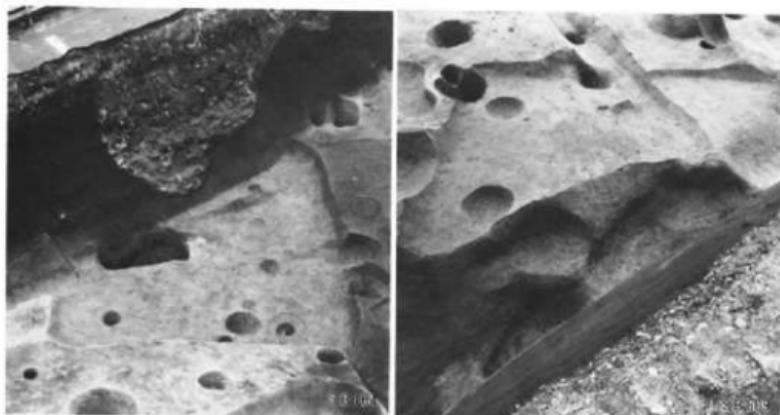


Fig. 5 弥生後期の住居址

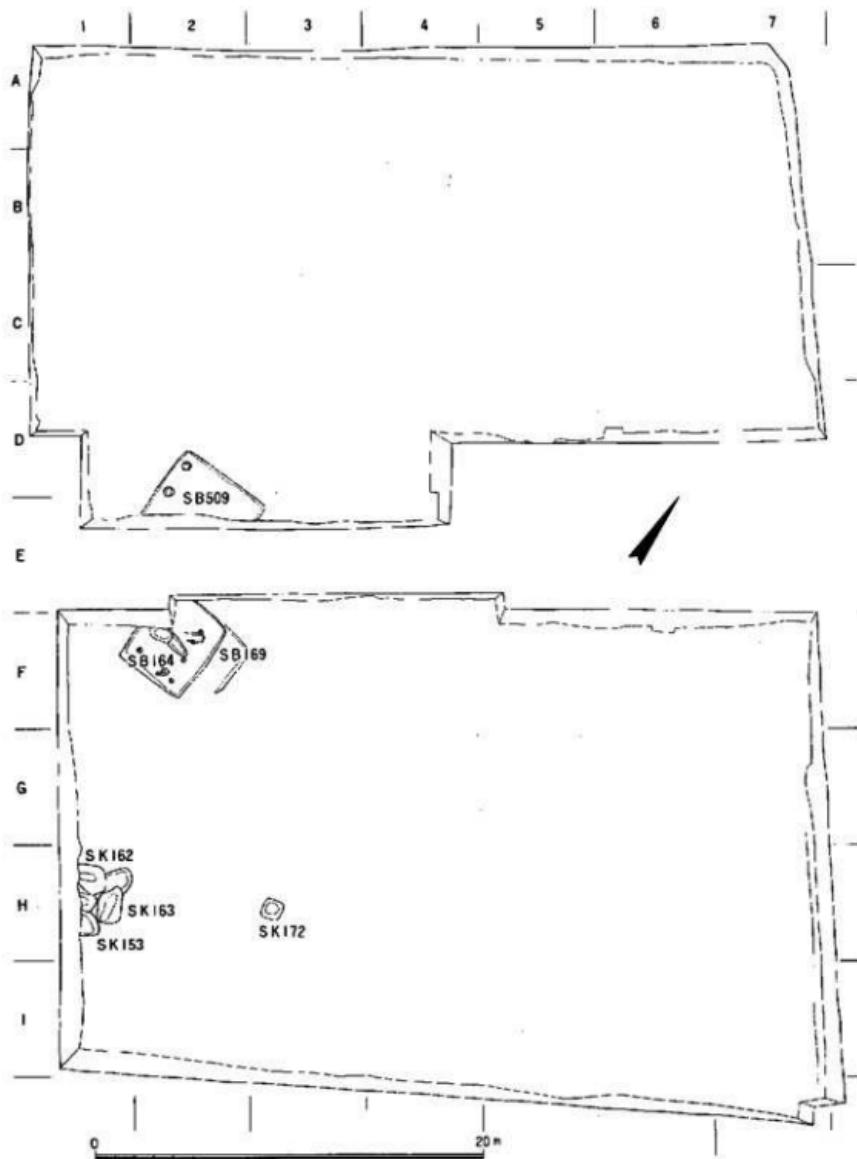


Fig. 6 漢生時代遺構分布図(1:300)

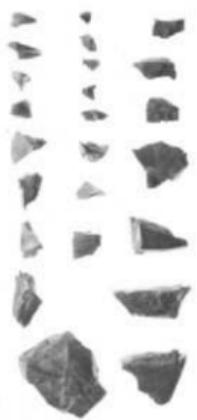


Fig. 7 SB164・SK153
出土碧玉剝片



Fig. 8 SK153(東から)

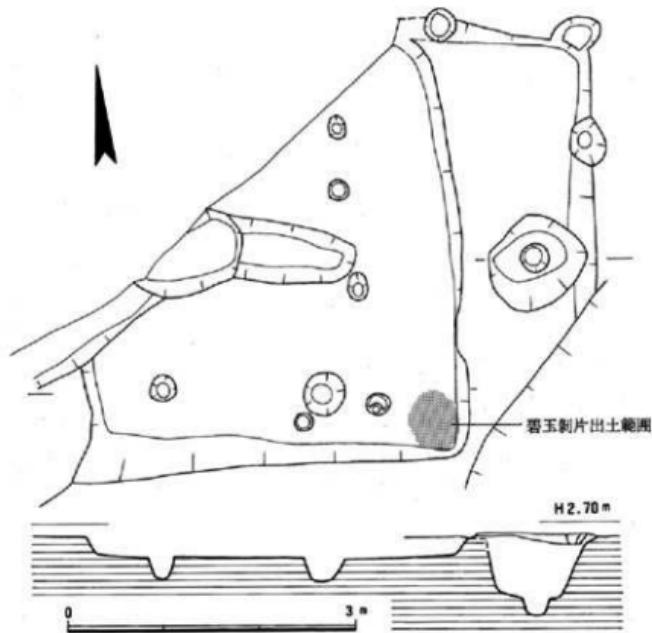


Fig. 9 SB164実測図 (1 : 60)

SK153と出土土器 (Fig. 8・10)

上端で南北1.3m、東西1m以上、深さ0.3m（底面の標高2.1m）の不整楕円形の土塙である。埋土は暗灰白色砂。出土土器は底面近くと、若干浮いたものがあり、必ずしも一括廃棄とはいがたい。この点は、復原にあたって完形になる土器がほとんどないことに符合する。図示した土器はその一部だが全体を見通しうるものととりあげた。

壺（1・2） 1重口縁或と台付きの広口短頸壺がある。2の体部外面はヘラミガキ。

甕（3～5） 口縁部が短く外反し、口縁部と体部の境内面に稜をもつと、体部が丸みをもち境の不鮮明な3・4がある。5の体部外面下位は板ナザ状のケズリ調整。4の体部内面には粗いケズリもみられる。

器台（6～9） 4種ある。6は高杯に等しい形態の脚部であるが、杯部との境を抜いて成形したもの。透し孔は4個づつの2段にある。7は通常な盤形、受部が大きく外反する。8は舟形器台と称する組合せの焼成台である。9は受部・台部のあいだが屈折してよくしまる鼓形器台である。プロポーション上は天地逆に見えるが、上方の内面がヘラミガキを施すのに対し、下方の内面はケズリのまま終る。広い意味で川陰系（鎌尾I式）土器の特徴を備える。全体に鉋重なつくりで、胎土からみても在地製といえる。

弥生後期末葉に比定される。

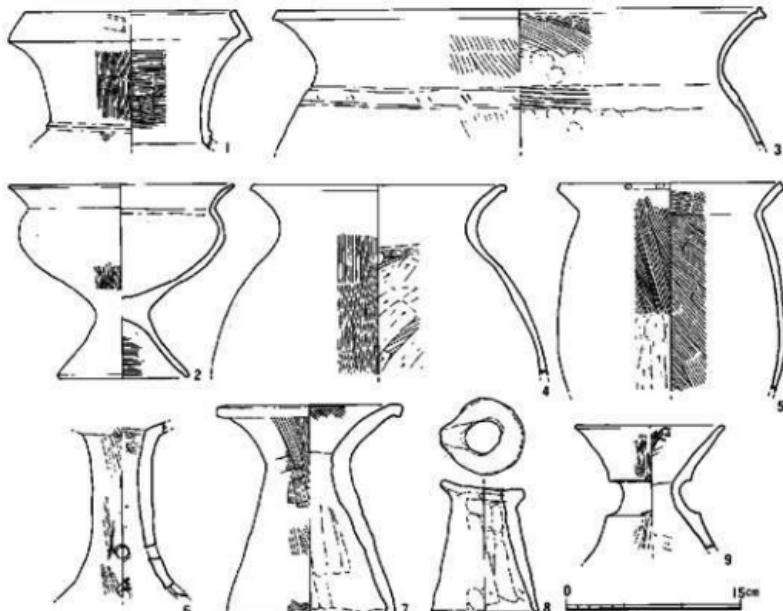


Fig. 10 SK153出土土器実測図(1:5)

2) 古墳時代の遺構と遺物

奈良時代遺物を最新とする包含層下から検出される。しかし後出遺構による破壊と、該期遺構の重複が著しいものもある。若干調査ミスを犯したところもある。

前期の遺構は、弥生後期終末から継続する集落（竪穴住居）がある。しかし、この集落は全く継続することなく、庄内式（新）併行期、もしくは布留式（古）併行期に廃絶する。

布留式（古）併行期には、この一帯は墓地になったらしい。方形周溝墓S X200、木棺墓S X541・542が検出された。後二者のばあい、後出遺構によって完膚なきまで破壊され、木棺被覆土（砂）に含まれる赤色顔料からかろうじて確認した程度である。棺の断面形から、いずれも割竹形木棺の直葬と判断される。副葬遺物はみとめられなかった。

また遺構検出時に、遊離した1本の銅鏡を探集した。柳葉形銅鏡であり、後出遺構に破壊された埋葬施設が他に存在した可能性がある(Fig. 25)。

この段階で、方形周溝墓の南側に調査区を東西に貫く溝2条（SD159・161）が設けられる。

5世紀代には、土塙SK175しかみとめられず、また遺物もごく少量である。

再びこの地に集落が営まれたのは7世紀を前後する頃以降である。7世紀前半を中心とした竪穴住居址11棟、土塙、溝などがある。7世紀中葉以降は掘立柱建物に推移し、そのまま奈良期の集落に継続する。

前期の溝 SD159・161

方形周溝墓の南を東西に貫く溝である。SD161は調査区幅の延長38mにわたる。SD159は東端で中世の大形土塙によって破壊・消滅するが、SD161に平行したとみられる。

溝は遺存状況のよいところで幅2~3m、深さ0.7m、丸みをおびた逆台形の断面形をなす。埋土は黒色砂、底面は多少凹凸があるものの標高2.1~2.3mでほぼ水平位を保つ。

砂丘上にあるため、この2条の溝が排水を主目的とした溝とみなしがたい。また両溝が芯々で5.5m前後の幅をとり平行することから推して、何らかの区画か道路側溝かもしれない。調査区西壁断面の観察では、両溝間に灰白色砂と黒色粘質土互層の高まりがみとめられた。両溝にはさまれた間が一つの機能をはたした可能性がある。



Fig. 11 SD159・161(東から)

20m

Fig. 12 右横・左斜・右斜時代標分布図(1:200) 点線は上層地塊による範囲を示す





Fig. 13 古墳・奈良時代および中世下層遺構全景(南東から)

方形周溝墓 SX200

17・20次調査にまたがって検出された。17次調査では南・東辺周溝と埋葬施設、20次調査で北辺周溝の一部をそれぞれ調査した。

周溝の西辺中央が4.5mにわたってとぎれ、いわゆるブリッジをなす。台状部の規模は東西12m、南北12mの略方形、周溝は幅1.5~3m、深さ0.7mあまり、逆台形の断面形である。埋土は黒色砂、弥生後期~古墳前期にわたる多量の土器が出土した。また台状部端から赤色顔料を収めた広口短頸壺が出土している。供獻土器であろう。

埋葬施設は台状部中央に東西方向に置かれた木棺である。後出の遺構が多いなかで奇跡的ともいうべき遺存状況であった。

棺を収める墓塙は東西2.6m、南北1.3mの隅丸長方形プラン、深さ0.4mあまりの舟底状断面形をなす。棺は墓塙底面上に10cmほど砂を敷いた上に安置する。棺は長さ1.95m、幅0.4m、深さ0.3m、半円形の横断面形から割竹形木棺と推測される。木棺被覆土は砂だが、赤色顔料を混入したためか真紅色であった。また棺底・側縁部も5cmほどの厚さに赤色顔料がしみこむ。

棺の両小口の南側縁に薄く灰白色粘土を巻く。棺身と蓋の合せ目部分を目張りしたものであろう。棺内に副葬遺物ではなく、棺の東端に近い両側縁上部から、剣と錐が1本づつ出土した。棺身上端レヴェルに一致し、蓋被覆時の棺外副葬と思われる。

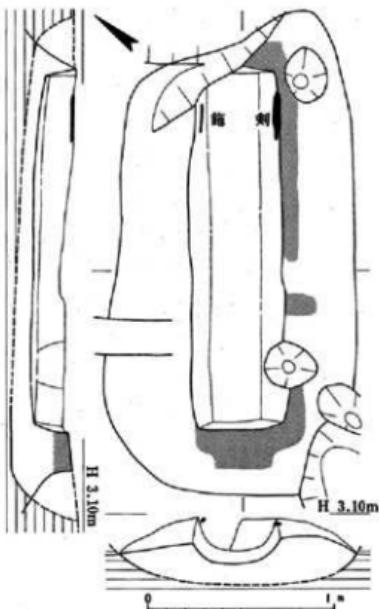


Fig. 14 SX200

(1 : 30)
アミは粘土

SX200出土遺物

棺外副葬品(Fig.15) 棺の北側に鉤、南に劍が配されていた。

鉤(1) 刃部を欠く。現長19.1cm、茎が長く先端部が小さく鉤状に曲がる。茎に刀子片と思われる鉄片が付着するが、锈のため詳細不明。

劍(2) 柄の着装法が明らかでなく、また木棺の長さからみて、ヤリ先としての副葬状況を想定しないため、劍としておく。全長25.4cm、長さの割に刃幅が広い。

茎の目釘穴は锈が著しく不明。鋒近くに布痕が残る。布目順郎氏によれば、1cmあたり縞糸40本、絹糸60本をかぞえ綿織物であるという。

周溝出土土器(Fig.16)

周溝が先行する遺構を破壊して掘削されているため、出土土器に時期幅がある。こうした弥生後期末葉～庄内式併行期の土器群と、上層出土の混入品と思われる後出遺構期の一群を除くと、布留式古相に併行する土器群が抽出される。周溝内土器出土状況は、新旧が混在し、かつ細分化しており供獻状況をとどめるものはない。供獻土器と思われる広口壺(6)はブリッジに近い台状部端から出土した。

Fig.16 に図示した土器のうち、7の高杯、8の甕(初期須恵器を模倣した土師器)は5世紀前半代の混入品かと思われる。6の広口壺は、細かなハケメの上に内外面とも丁寧なヘラミガキを加えた赤褐色の良質な土器である。2の甕の内面には黒色顔料が塗布されている。

1～3は口縁端が内面斜め上方にひきだされる古い手法ととどめる。

5の器台、6の広口壺を含めて、SX200造営期の土器群と理解し、北部九州の柳田編年Ib～IIa期に属すると想定する。

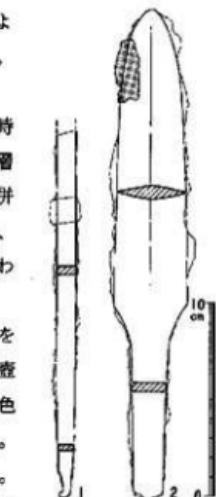


Fig. 15 木棺出土鉄器(1:3)

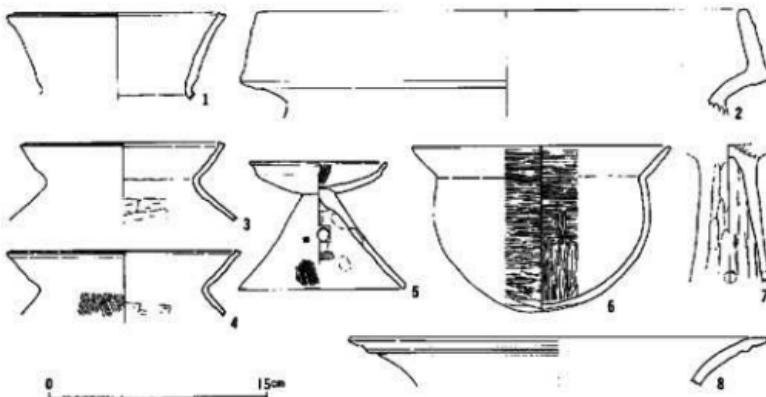


Fig. 16 周溝出土土器実測図(1:4)

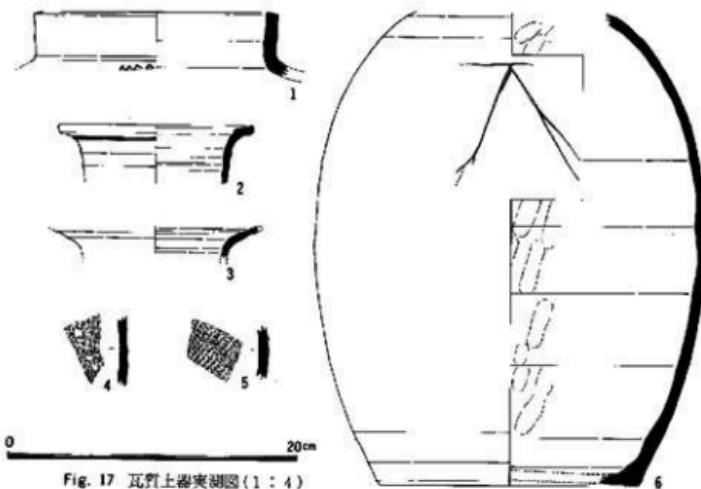


Fig. 17 瓦質土器実測図(1:4)

瓦質土器 (Fig. 17)

前期溝、方形周溝墓溝などから朝鮮半島製の瓦質土器が出土したので紹介する。

短頸壺(1) S D159出土。体部を欠く。復原口径17cm、口頸部は短く微妙にカーブして立ちあがる。体部肩上端に三角形刺突文がめぐる。胎土は精良、暗灰色、瓦質である。

壺(2) S B169 (S X200周溝埋土を切ってつくられた7世紀初めの住居址) 埋土出土。復原口径13.6cm。ロクロナデによる凹凸の著しい頸部から口縁部が肥厚ぎみに外開する。口縁下に2条の細い沈線がめぐる。胎土は精良で灰色、器表は淡黒褐色を呈する。瓦質。

壺(3) 口端部・体部を欠く小片。傾きから壺と判断される。胎土・焼成等は2に等しい。

4・5は器形を断定しがたいが、体部破片である。破片の傾きは任意に設定した。いずれも細かな格子叩き、胎土は精良、灰色の瓦質である。S D159出土。

長胴壺(6) S K175出土。口頸部を欠く。体部に2個の環状把手がつくと思われるが、現存部位にはみとめられない。底部の遺存が少ないため、器形の傾きが若干変るかもしれない。復原底径18.2cm、現高32.8cm。体部の外面はロクロナデだが、内面に成形時の指頭圧痕が残る。外面下位に回転ヘラケズリを加える。外面上位に図のようなヘラ記号を描く。胎土は選良だが小砂粒をわずかに含む。硬質の焼成とはいえ瓦質に近い。黄味をおびた灰白色。

1~5は、布留式古相併行期のIb~IIa期にともなうとみてよい。1は百濟地域に特徴的なプロポーションと刺突文を備える。2は楽浪の系譜で考えるべき器形だが百濟地域にはいま類例を見いだしがたい。3~5は小片のため何ともいえない。6の長胴壺のばあい、もっとも類似する例はソウル市城東区九宜洞遺跡の土器があげられる。九宜洞遺跡は遺跡の性格もいま一つ不分明で、かつ出土土器も高句麗・百濟のいずれとも現状では決めがたい状況である。

後期の集落

該期の遺構は、基盤砂丘の低い南半と、高まつた北半とのあいだに帶状に分布する。もっとも、砂丘の高まつた部分では、すでに遺構が削平されている可能性もある。

検出した遺構は堅穴住居址、土塙、溝などである。出土遺物からみると、後期にこの一帯が集落空間として利用されはじめたのは7世紀を前後する頃で、8世紀にいたるまで間断なく継続するらしい。堅穴住居址から出土する遺物は7世紀中頃までなので、以降は掘立柱建物に推移したと思われる。

検出された堅穴住居は11棟(SB167・169・173・177・178・278・463・464・468・490・535)だが、中世の大形土塙や井戸によって消滅したものもあるかと思われる。そのなかでもっとも多い重複は3回あり、ほぼ半世紀と想定される住穴住居址群の継続からみて妥当な建替えといえる。しかし限られた調査範囲のなかで、はたして集落構成のいかなる部分にあたるのかも明らかでない状況では、単位集団の抽出と動態の追求は困難といわざるをえない。もちろん、この段階に掘立柱の倉をともなうのが通有であり、今後の検討課題としたい。

堅穴住居址は一辺4~6mの方形、長方形プラン、主柱穴4本、壁面にカマドを付設するものと、カマドの検出されないものがある。後者のばあい、堅高の遺存状況にもよるが、包含層からは土師質のカマドも出土しており、検討を要する。

7世紀中葉以降の掘立柱建物については、いくつかの復原案があるが、柱穴出土遺物の未検討もあって、今回は省略する。

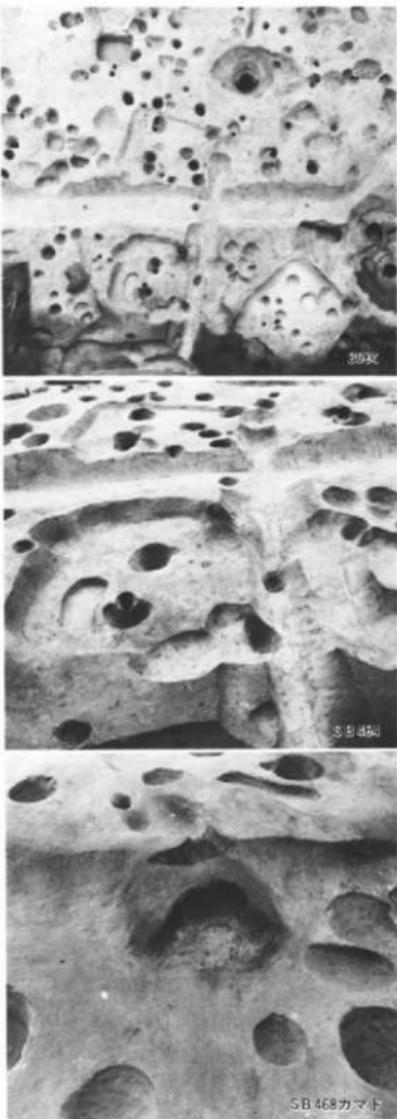


Fig. 18 後期の集落

3) 奈良、平安前～中期の遺構と遺物

奈良時代の遺物は調査区全域から出土したが、前半～中葉期が主体をしめる。8世紀末頃から10世紀のはじめまでの遺物は皆無である。10世紀代ではSK280のような土壙もみとめられるが、その後再び遺跡としては断絶し、つぎに遺構・遺物が出現するのは、博多中心部と同じように11世紀中葉をまたねばならない。

奈良時代遺物は多量の土器とともに、図示した墨書き器、帶金具などが注意される。この期の遺構としては掘立柱建物で構成される集落が予想されるが、前項で述べたような理由で復原案を提出しえない。本報告で責を果したい。

包含層出土遺物 (Fig. 19)

一応時期の目安になるような須恵器を図示した。8世紀前半～中葉に属するものである。7の墨書きは、一部を欠くものの筆のはしりから「風」と思われる。帶金具⑫ 背銅製鉈尾。幅・長さとも2.1cm、先端が丸みをおびる。

SK280出土土器 (Fig. 19 - 9～11) 17次調査区東端の排水溝切り部分にあたったため、プランを見落してしまった。断面のみで確認した土壙である。

土師器挽と小皿、越州窯系磁器がある。土師器は法量、器形から太宰府編年のSK674期（10世紀中葉）に比定される。越磁の碗は口径15.2cm、器高5.2cm、輪花の口縁である。釉は器全面にうすく施釉したち、高台疊付け部の釉をカキ取る。緑灰色を呈する。内底見込みに白砂の目跡がめぐる。

8の玄界灘式製塩土器は包含層から出土したもの。頸部のしまりが弱く、口縁部の外反度も小さい。SK280の段階に属する可能性がつよい。

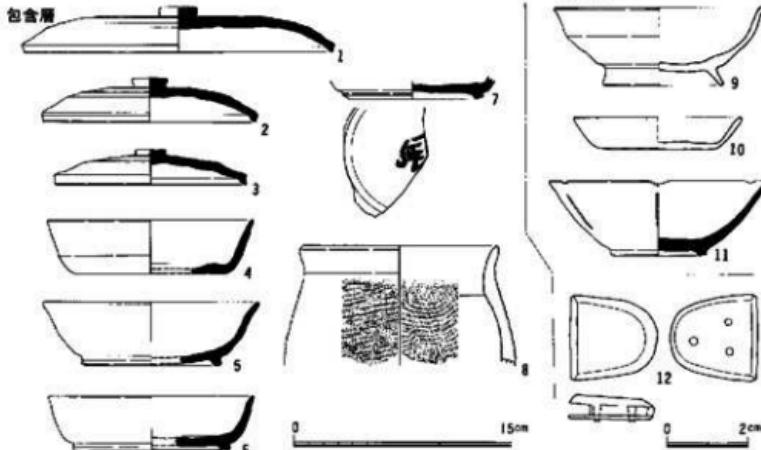


Fig. 19 出土遺物実測図

4) 中世の遺構と遺物

中世都市博多に関連する遺構は調査区全面にわたって検出された。しかし、輸入陶磁をはじめとして、コンテナ400箱にのぼる中世関係の遺物は未整理の状況にあり、ここでは遺構の大まかな概要を記すにとどまる。

中世の遺構は、江戸期以降の搅乱層を除去するとただちに確認される。しかしこのレヴェル（標高3.8m前後）では、遺構埋土と周囲の土との差異が微妙でほとんど識別不可能に近い。また中世の包含層も0.5~0.7mと厚くなく、キーとなるべき遺構面が検出されないこともあって、やむを得ず奈良時代包含層上面まで掘り下げた。したがって掘り込みの浅い遺構は、この過程で消滅した可能性も否定しえない。

検出した遺構は、井戸、土塙、溝のほか、多数の柱穴がある。

遺構で注目されるのは、博多の街割に関連するいくつかの溝である。17・20次調査区を南北に貫通するS D24、20次調査区を東西に貫くS D467は、現在の街並に近い方向をしめす。出土した遺物から、S D24は16世紀、S D467は14世紀代でもさほどどうらぬ年代が推測される。また溝とはいえないかもしれないが、S D467に先行する二つの溝状遺構S D466・529は平行する方向をとり、街割方位に関連する地割の可能性がある。いずれも12世紀代の遺物が出土している。

32基におよぶ井戸の存在は、この一帯が永く居住地として使用されたことを物語る。奈良～平安と考えられるS E171、江戸後半期以降と想定される瓦組の井側を用いたS E426を除く30基の井戸は13世紀から16世紀にかけてのものである。なかでも14・15世紀に集中する。

土塙も大小さまざま、土塙墓と思われる5基を除けば、その性格はほとんど明らかでない。いくつかの土塙には多量の土器廃棄例がある。

数多く検出された柱穴は14~16世紀代と思われる。しかし、いまのところ確定な平面プラン復原案をしめしえない。ただ土塙、井戸の分布状況からすれば、この一帯が獨立柱建物が屋根を並べた都市空間を構成したと容易に推察される。数世紀にわたって継続的な居住地として利用され、これほどの遺構の重複するばかり、建物の平面的な復原はもはや不可能といえるかもしれない。とはいっても今後、出土遺物の検討を通して宅地、街並の復原に取りくまねばならないであろう。

検出した遺構・遺物から総じていえることは、今回の調査地点は博多中心部に比較して、中世包含層の堆積が薄いこと、12・13世紀の遺構・遺物が相対的に少ないと、とくに輸入陶磁は量的に少ないとなどがあげられる。いわば、博多の都市空間が序々に拡大される過程で新たに編入された地域といえるかもしれない。

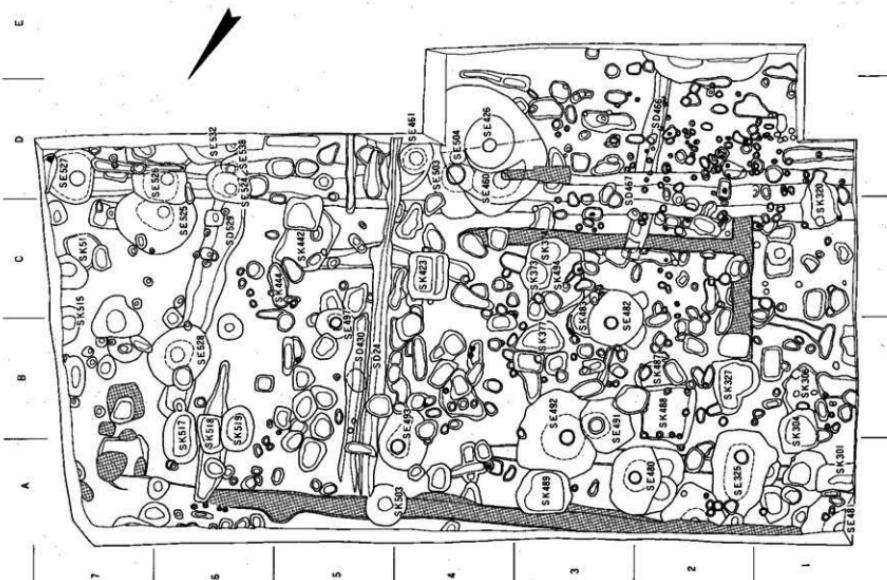
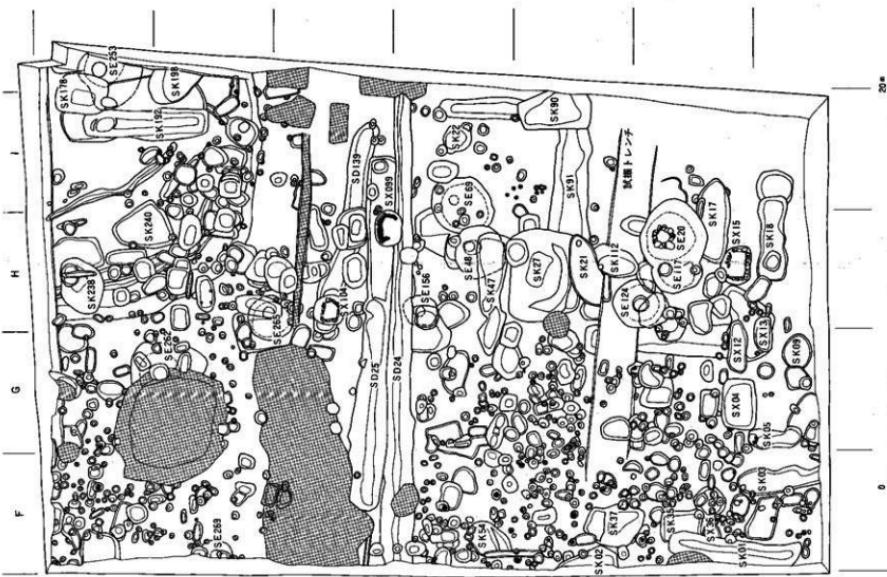


Fig. 20 中世遺構分布図(1:200) アジ材櫛足による壁面を示す

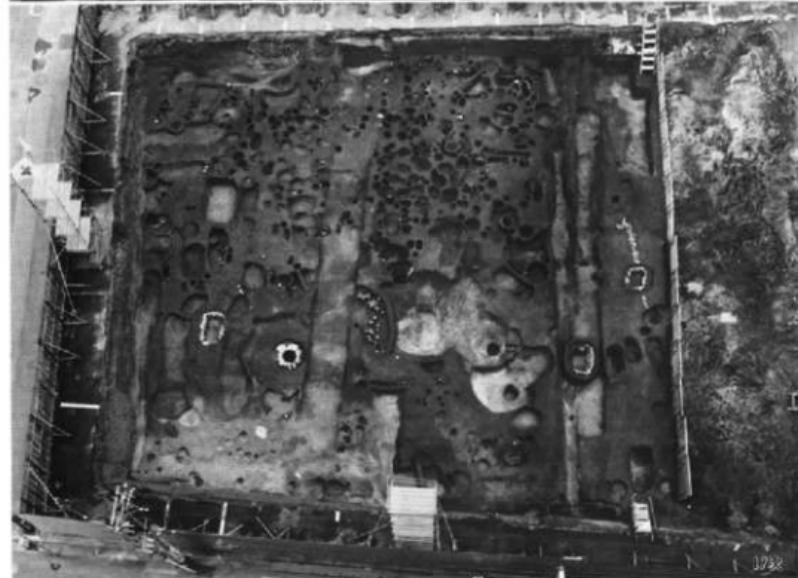


Fig. 21 中世上層遺構全景(南東から)

溝

大まかに2方向の溝と溝状をなすものがある。

一つは、太閤街割の姿を残すといわれている現博多街筋に並行するSD24・467、いま一つはSD467に先行するSD466・529である。前者の溝は直交方向だが、仔細にみるとわずかな差異がみとめられる。

SD467は後出の井戸によって寸断されているが、20次調査区幅の延長40mにわたって検出された。方位はN 56° Eをはかる。上端幅2.7m、深さ0.7m、丸みをもった逆台形の断面形をなす。底面レヴェルは標高2.6mあまりで、ほぼ水平位を保つ。埋土は黒褐色砂質土、13世紀を下限とする土器が出土した。下限をしめす時期の遺物は少なく、むしろ弥生～奈良時代土器が多い。

SD24は17・20次調査にわたって南北52mを検出した。方位はN 31° Wで、現大博通り筋よりわずかに東に振れる。地図上で見るかぎり、本調査区より北方300mの第8次調査区（東長寺本堂）で検出された南北方向の溝に接続する可能性がある。上端の幅1～2m、深さ0.3～0.7m、南に向ってしだいに下降する地形に沿って、底面は南が低くなっている。埋土は黒褐色粘質土、16世紀代を下限とする土器が出土し、明染付、李朝陶器なども含まれる。SD24の東に接して、後出するSD25とSD430がある。したがってこの位置が、何らかの区画として一定期間継続したことしめす。

SD469に先行する溝状遺構SD466・529は、20mほどの間隔をおいてN 68° Eの方位で平行する。しかし、いまのところこの方向の街割、区画は博多で未検出である。遺構のあり方からも、強く主張しえる内容ではないので参考程度にとどめたい。

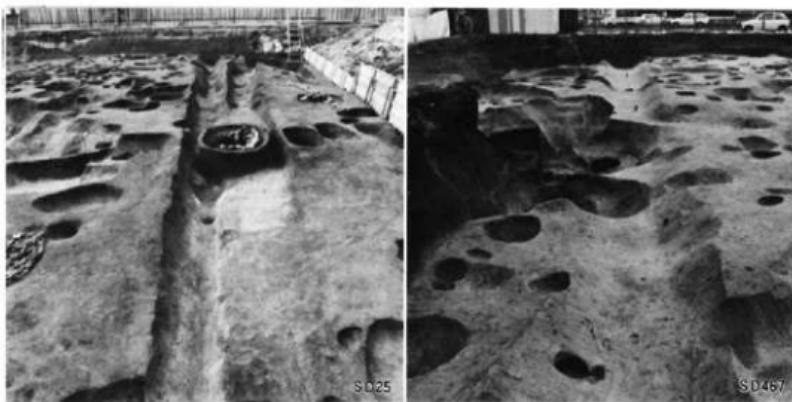


Fig. 22 溝

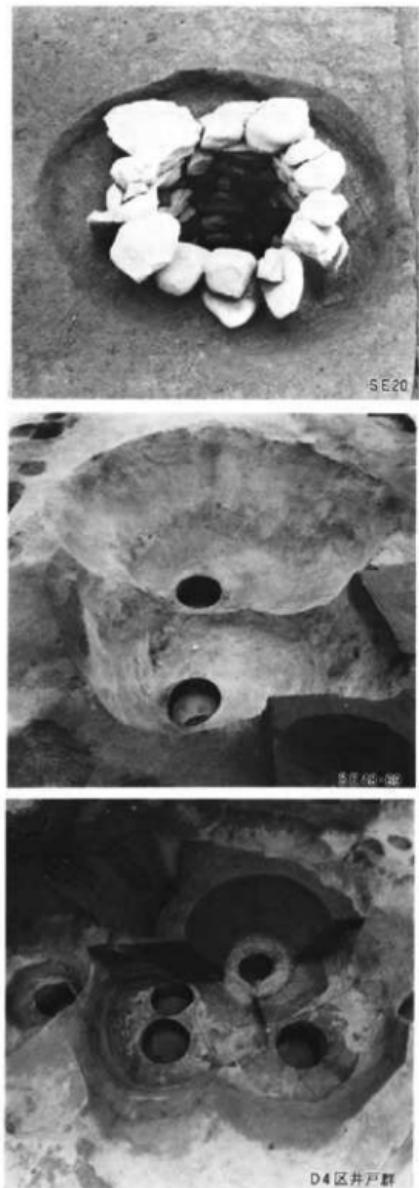


Fig. 23 井戸

井戸

17次調査11、20次調査21の計32基を検出した。調査区に満遍なく分布するが、東西方向に並列する傾向がうかがえる。また同時に、数ヶ所かにまとまった集中がみられ、重複する井戸も少なくない。出土遺物の検討を経ていないので速断しえないが、こうした集中的な井戸分布を、限られた宅地内の継続的な掘削の結果と解すれば、ある時期の宅地配置をしめす可能性があるといえよう。

井戸の掘り方はいずれも円形、基盤が弱い砂丘のため掘削傾斜をゆるくとり、必然的に規模が大きくなる。もっとも大きなSE 426（瓦組み井側、江戸後期以降）では径5~7mにおよぶ。一般的なものでも径2.5~3m、小さなもので径1.5m前後である。井戸の深さは、もっとも標高の高いSE 497で1.9m、低いSE 253は0.3m、0.9~1.4mのものが多い。概して時期的に遅る井戸が掘り方が小さく、掘り込みも浅いという傾向は指摘される。

井側は綾上の瓦組のほか、1例の石組（SE 016 石組下には曲物を置く）を除いて、すべて木桶を数段に重ねたものである。しかし、井側の保存状態はよくなく、最下段すら遺存しない例もある。木桶は径0.6m前後のものが多く、最下段の完存するSE 253のばあい、その高さは0.7mをはかる。

井戸廃棄時に、井側内に土師器、陶磁器や石などを投棄した例（SE 486・325）もあるが、他にはみとめられなかった。一般に上段の井側が腐植して掘り方埋土が落ちこみ、上面が浅皿状に凹む例が多い。このばあい、上段井側の抜き取りも考えられるが、埋土に大きな差異がないかぎり、識別がむずかしい。

土塙

調査区全面にわたって 250をこえる土塙が検出された。しかし、多くは円形・椭円形、不整形のプランで、断面形も浅皿状・深皿状・壺鉢状など多様な形状をしめし性格は明らかでない。なかには S K423・488・499のように方形で、底面も平坦な例もある。S K 488では周壁に沿って柱穴を伴い、何らかの上部構造を想定しうるものもあるが、これとて明確な機能・用途を判別するにいたっていない。

土塙基（木棺挿入の可能性もある）と認定しうるのは、事実埋葬人骨の出土した S K12、輸入陶磁器を副葬した S X36、129の3例にすぎない。S X12の周囲には方向を揃えた土塙が他に3基あり、埋葬骨の遺存をみないものの整った形状から土塙基の確率が高い。S X36は13世紀、12・129は14世紀代と思われる。このばあい、土塙基がはたして宅地内に営まれることがあったのか否か、という問題も都市空間の推移という視点から問われよう。今後の検討課題としたい。

なお特殊な例として、小形の転石を小石室状に積んだ土塙（S X015・099・104）がある。いずれも長軸を南北に揃える。長辺で1~1.3m、短辺0.7m前後、高さ0.4mあまり、上方に外傾する石組みである。底面には何の施設もみとめられない。S X099が16世紀の溝 S D 24・25埋没後に営まれており、年代的には16~17世紀と推測されるが、博多では初例の遺構である。

多量の土師器一括廻棄例として、S K021・022・085・198などがある。杯・皿を主体にしており、輸入陶磁器をほとんど伴わない、14~15世紀の事例である。



Fig. 24 土塙

5) 小結

以上、駆足で調査の概要を述べた。17・20次調査は、これまで25次にわたる博多遺跡の調査で遺物は出土しているものの造構の実態が明らかでなかった中世以前について、豊かな内容の一部を検出した。以下、時代を追って要約し、本報告に備えたい。

1. 弥生時代後期末葉に集落が出現し、古墳時代前期初頭までの短期間繼續する。注意されるのは、山陰系土器が少量ながら搬入されていることと、碧玉を用いた玉生産が行われた事実である。玉造りの工房など実態を知りえなかったが、玉生産の系譜を含めて山陰地方との交流が検討されねばならない。

2. 叙上の集落廃絶直後に、この一帯は墓地として利用される。検出された遺構は方形周溝墓1、木棺直葬墓2と少ないが、銅鏡の出土もあり破壊されたものも少なくないと思われる。方形周溝墓の南に接して、芯々で5.5mほどの間隔を置いて平行する2条の溝がある。その間は灰白色砂と黒色粘質土の互層からなる高まりとなっている。溝の出土遺物からみて方形周溝墓とほぼ同時期ということもあって、墓地空間を画する何らかの施設か否か、検討を要する。

また、この期の遺物で注目されるのは朝鮮半島から搬入された瓦質土器の存在である。出土遺構の伴出遺物から、かなりのところまで年代を限定しうる。瓦質土器でも器形・手法の特徴から百濟地域（三国時代百濟地域ではなく、後の百濟下に含まれる範囲）の製品が多く、4世紀代の彼我の交流を考えるうえで重要である。時期の遅れて、5世紀前半と推測される長調壺は、ソウル市九宜洞遺跡出土土器に極似する。九宜洞出土土器自体、未だ高句麗・百濟土器のいづれか断定しうるにいたらない。この段階にいかなる事情のもとでこの土器が搬入されたか明らかでないとしても、北部九州沿岸地域と三国との交流史に大きな波紋をなげかける一片の土器である。

3. 古墳時代後期の7世紀を前後する頃から奈良時代中葉にかけて、再び集落が形成される。奈良時代の遺構分布範囲はかなりの範囲に及ぶとみられ、限られた調査範囲ではいかんともしがたい。今後の調査進展に期待するとともに集落復原をすすめなければならない。

4. 奈良時代の遺物に関していえば、本調査区では墨書き土器、青銅製帶金具各1点にすぎないが、21次調査で円面鏡、石帶、鴻臚館系軒丸瓦、22次調査で帶金具が出土している。その他の調査でも石帶、墨書き土器などの出土例があり、一般集落とは異質な側面ももつこともたしかである。「博多大津」は鴻臚館にのみ限られるべくもない。今後の検討に期したい。

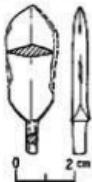


Fig. 25 17次調査出土銅鏡
(1:2)

III. 第22次調査の概要

博多遺跡群第22次調査区は、博多区冷泉町189番地に所在する。ビル建設予定地となつたため、先立つて調査を行なつた。原状は寺で、その建物が対象地東半部、西半部北半にあり、西半部南半は墓地となつていた。

調査は、申請面積1566m²のうち、対象面積1249m²としたが更に、周囲の建物への影響等を考え、最終調査面積で843m²について行なつた。予想外の近世墓地の遺存、遺構の密度などによって、東半部（E区）は最上面の近世墓地の他はトレンチでの確認調査だけに留まつた。西半部（W区）については、最下面である地山砂丘の面までの調査を行なつた。最下面の調査面積は472m²を測る。調査期間は、昭和59年9月1日から翌年2月29日までを要した。

層序と調査面 調査は、試掘報告によつて現地表下1m、粗砂混りの褐色土層であるⅢ層除去後の面を調査開始面とし、Ⅲ層面とする。この面の標高は略4mである。表土層以下Ⅲ層面までは整地によって形成されたものとみえる。全体に一様で厚い。Ⅳ層は、上部では粘土混りの暗灰色砂であり、調査区全体に分布する。Ⅳ層のなかでも調査区西辺部では同じ高さの位置に、砂と暗灰色土とを版築状に重ねた整地層がある。Ⅳb層とする。Ⅳb層は更に細分できるが、それについては後述する。Ⅳb層の範囲より東では、部分的に焼土、灰の薄層が互層を成し、これも整地によるものとみられる層がある。Ⅳc層とする。Ⅳb層・Ⅳc層下に黒色の粘土混り砂層がみられる。これをそれぞれⅣb4層・Ⅳd層として調査、遺物を採集した。Ⅳ層を掘り下げる過程で遺構を検出した。その掘込面は判然としないが、少なくともⅣc層より上位の位置関係をもつた遺構である。Ⅳ層の遺構とする。Ⅳ層をすべて除去した面をⅣ層面とする。Ⅳ層面でも遺構を検出した。Ⅳ層面の標高は北辺部で3.5m、南辺部で3m程度である。Ⅴ層は、



Fig. 26 22次及び周辺調査区(1:2000)

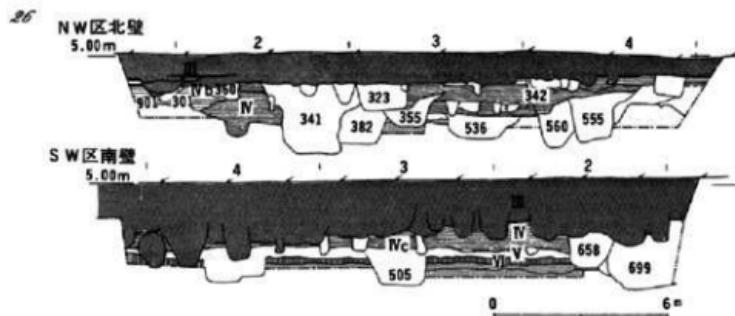


Fig. 27 土層図(北壁、南壁) 1:200

わずかに粘土を混じえた暗褐色砂層で調査区の全体に分布する。これは周辺遺跡の調査に際して鍵層となろう。V層除去後の遺構面をV層面とする。VI層は黒褐色砂層で、調査区南半部に分布する。除去後のVI層面は、地山砂丘の面となる。各層各面で検出した遺構は、必ずしもそれぞれの面又は層を掘り込み面としている訳ではなく、上位の遺構の未検出分も少なからず含まれている。唯いま、各面及び層の遺構出土遺物の全体的な傾向をみると、V層面・VI層面は弥生時代以降奈良・平安時代までの、IV層面は平安時代後半から鎌倉時代前半にかけての、IV層は鎌倉・室町時代の、III層面は室町時代から江戸時代初め頃までという時代を考えることができるようである。

調査の成果は現在整理途上にあり全体を示し得ない。各面及び層のいくつかの遺構について、以下、下位のものから概要を記すことにする。



Fig. 28 V層面の遺構(SW区) 東から

VI層面・V層面の遺構

VI層面の遺構はW区南半(SW区)で検出した。台帳上6基を数える。1基を除き小穴である。V層面の遺構は、SW区及びW区北半(NW区)で検出し、31基を数える。小穴が殆どだが、井戸、溝、土塁も検出した。以下遺構について概要を記す。

甕棺墓 後世の遺構にかかり、上位の面で検出したものもあるが、一括して記述する。本調査区では5基を検出した。SW区に1基がある他は、すべてNW区の中央以西に集中分布する。このうち中央寄りの698号が成人棺である他は、すべて小児棺である。小児棺には、甕を合口にするもの(529号・691号・761号)、甕と壺とを組み合せるもの(397号)、单棺であるもの(838号)がある。これらのうち、南に離れて位置する838号が、中期後半と考えられる他は、いずれも中期前半の時期を考えることができよう。又、後世の遺構から何例か成人棺の破片の出土があり、一群を成していることが考えられる。東隣する地下鉄紙園駅出入口部調査区の甕棺墓地と80m程の距離をもつた別個の墓地であったのかも知れない。

754号溝 NW区で検出した。調査区外から南東に向うが、その延長上では確認できていない。幅1.7m、深さ0.4mを測る。覆土は、暗黒褐色で、調査区壁面での観察による限り、レンズ状の堆積を示すようである。覆土中から古墳時代初頭の土師器高杯、小形壺が出土した。

667号溝 NW区北辺より南方向に延びる溝である。現状での深さ0.2m足らずで、断面低い逆台形状を呈す。幅は一定せず最も広い部分で2.1m、狭い部分で0.9mを測る。C3区部分で、西方へ突出、あるいは分岐していたのかも知れない。覆土は、暗茶褐色、粘土混りの砂で、V層と同じである。遺物は、少量の土器片が覆土中より出土した。8世紀代の須恵器壺破片が、本遺構の上限を示すものである。



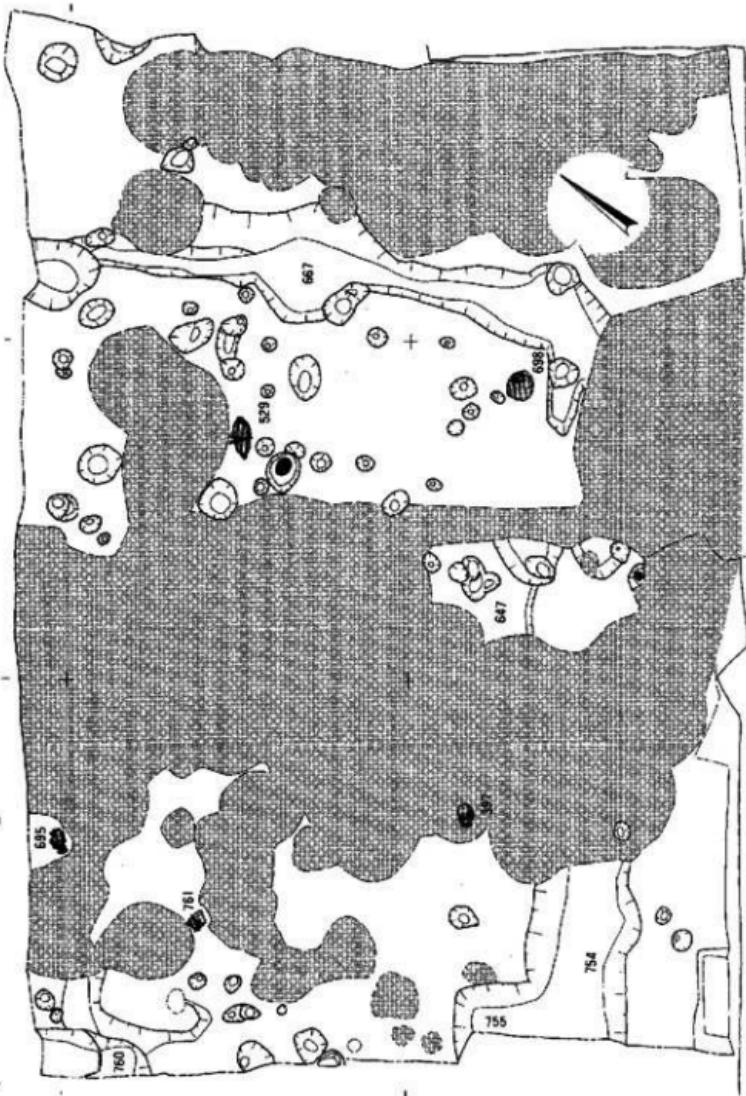
Fig. 29 529号甕棺墓(南から)

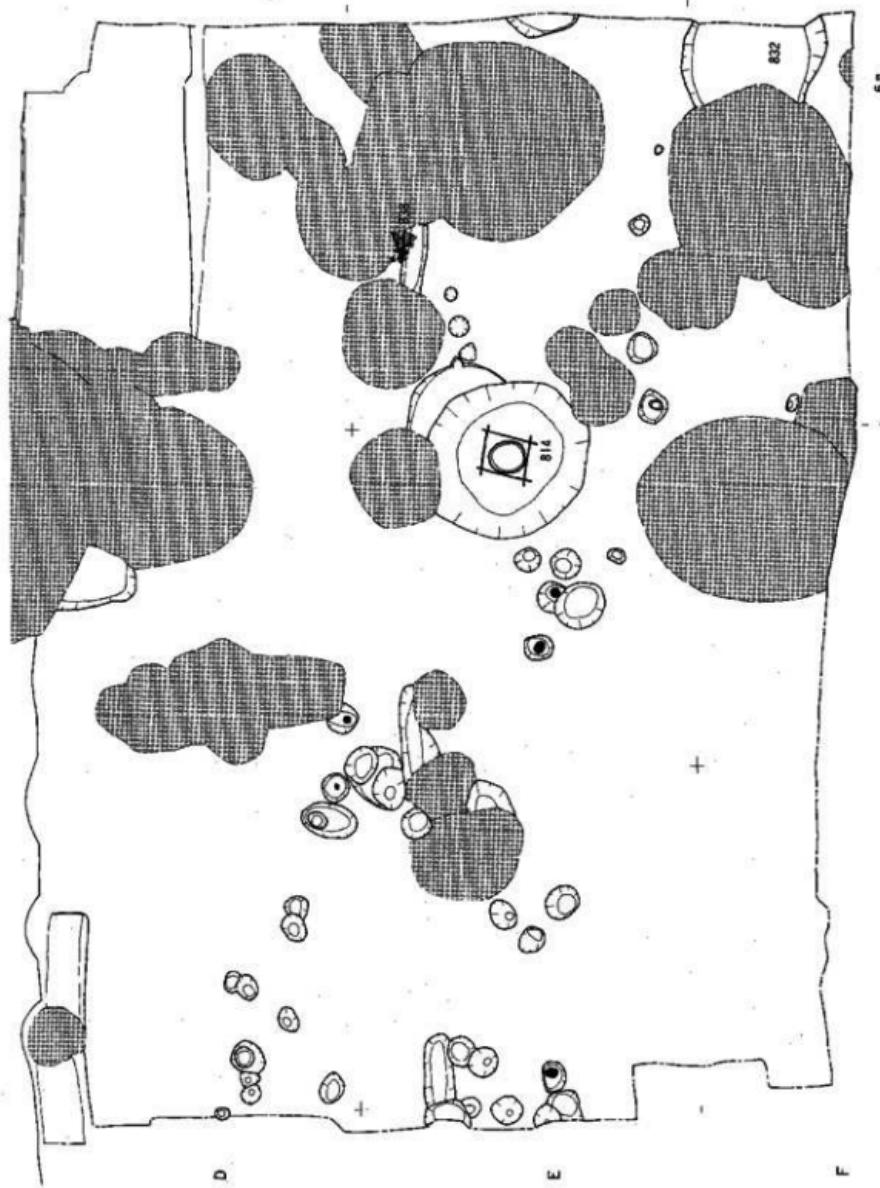


Fig. 30 754号溝(東から)



Fig. 31 667号溝(南から)





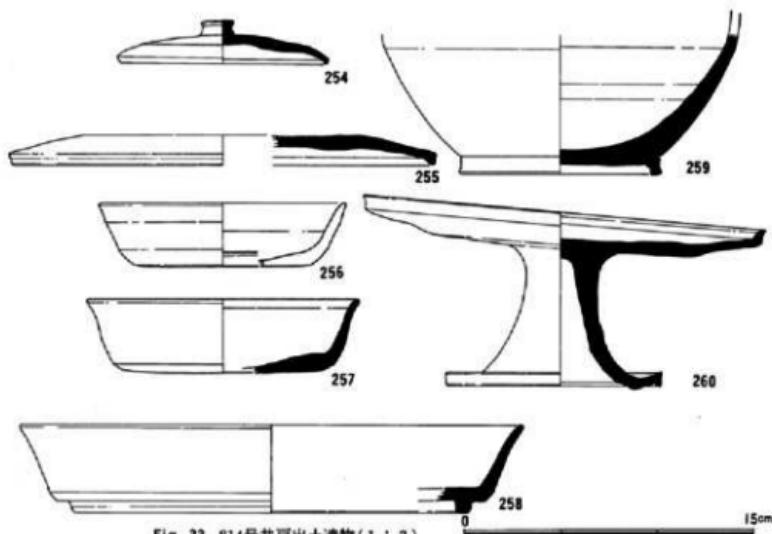


Fig. 33 814号井戸出土遺物(1:3)

814号井戸 SW区で検出した。掘形の平面形は橢円形状を呈し、長さ3.1m、幅2.7mを測る。断面は高い台形状を呈しており、底面近くで井戸側を検出した。井戸側は、上位のそれが板を井桁状に組んだ棒、下位のそれが、おそらく曲物とみえる円形の棒という2段の構造となっている。井戸側確認面までの深さ0.8m、井戸側下辺までの深さ1.3mを測る。遺物は弥生土器、古墳時代の土器を含めて収納用コンテナ1箱が出土した。全形を知り得るものをして示す。254・255は須恵器壺蓋で、254は完存する。口径は254が10.5cm、255が12.1cmを測る。256は土師器壺、257・258は須恵器壺である。口径は順に13.4cm、14.0cm、24.2cmを測る。259は壺下半部で、高台径10.5cmを測る。器表の荒れが著しい。260は一部を欠損する高壺で、壺部径20.8cm、高さ9.5cmを測る。

V層面・V層面の遺構出土ではないが、同時代のものとみられる資料の一例を示しておこう。261・175はともに鉄である。261は銅製鉈

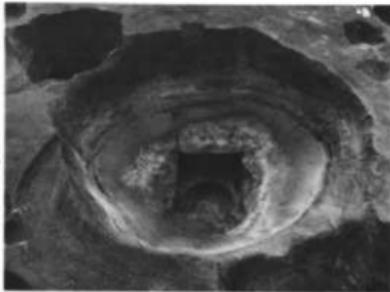


Fig. 34 814号井戸(北から)

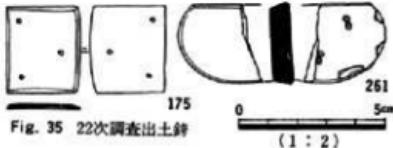


Fig. 35 22次調査出土鉈

尾の真金具であり、止穴が3方に穿たれている。装着状態を考えて、左右2.6cm、上下3.0cm、厚さは中央部で0.1cmを測る。IV層面625号土塙覆土中で検出した。175は石製丸軸である。半ばを欠失する。表面及び側面を研磨する。裏面には装着のために3箇所、それぞれ対向する方向からの穿孔を行ない糸通しの孔を穿っている。石材は、緑灰色半透明の部分と茶緑色の縞の部分とがみられるもので、玉軸であろうか。III層からの出土である。

IV層面の遺構

IV層面で調査した遺構は、台帳上217基を数えるが、その多くは柱穴あるいは性格不明の小穴である。それ以外の遺構のうち性格の知られるものは井戸である。井戸は5基を検出している。このような条件から、時期を明確にし得るだけの遺物を出土する遺構は多くない。ただIV層の遺構との比較において、糸切底の土師器を出土する遺構の少ないという現象はみられるようである。以下にIV層面検出の遺構2例を示す。



Fig. 36 IV層面の遺構(東から)

699号土塙 調査区南西隅にかかる、IVb層下の土塙である。断面ではIVb層が落ち込んでいる状態が観察される。覆土中に狭まれる灰層等の土圧による沈下の為であろうか。遺物は覆土中から散漫に出土した。3点を示せる。271は糸切底で内面に磨き調整を施す土師器である。272・273は白磁碗で、273は釉下に化粧土を施す。

703号土塙 平面形楕円形状を呈し、長さ1.3m、幅1.0m、深さ1.0mを測る。遺物は覆土中より出土した。総量コンテナ1/4程の量である。262は瓦器で内面に磨き調整を施す。263～267は土師器で265は糸切底である。皿の類は窓切底である。268～270は白磁である。

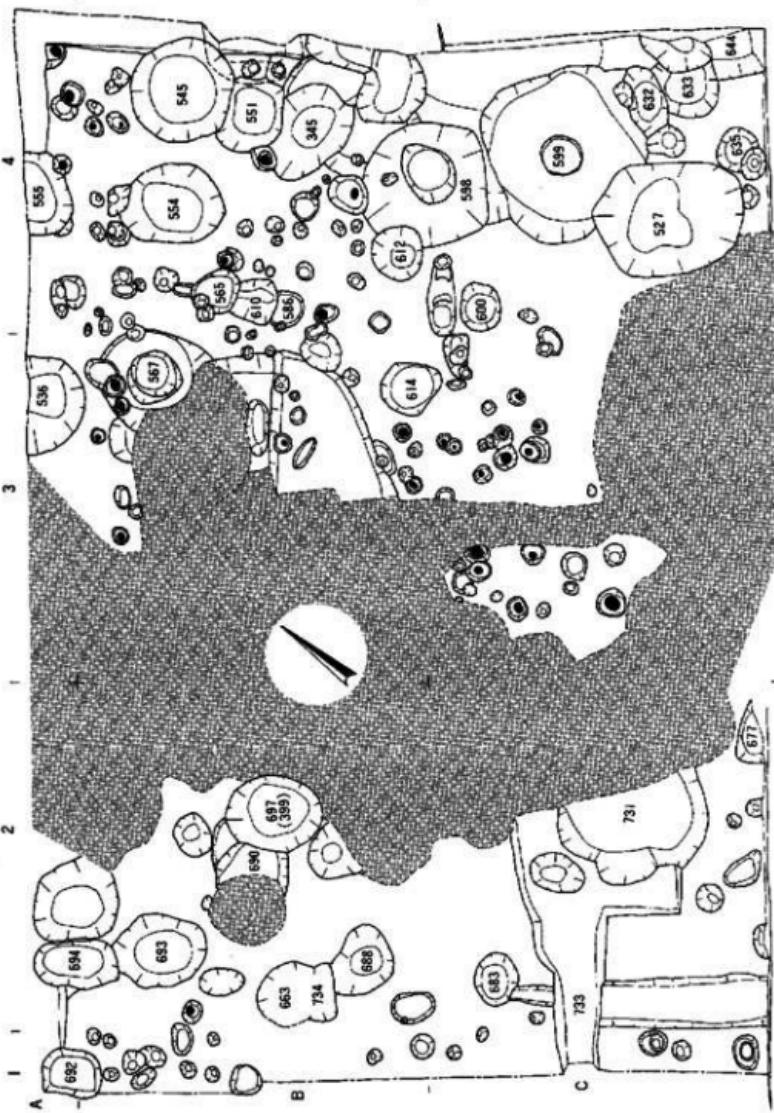
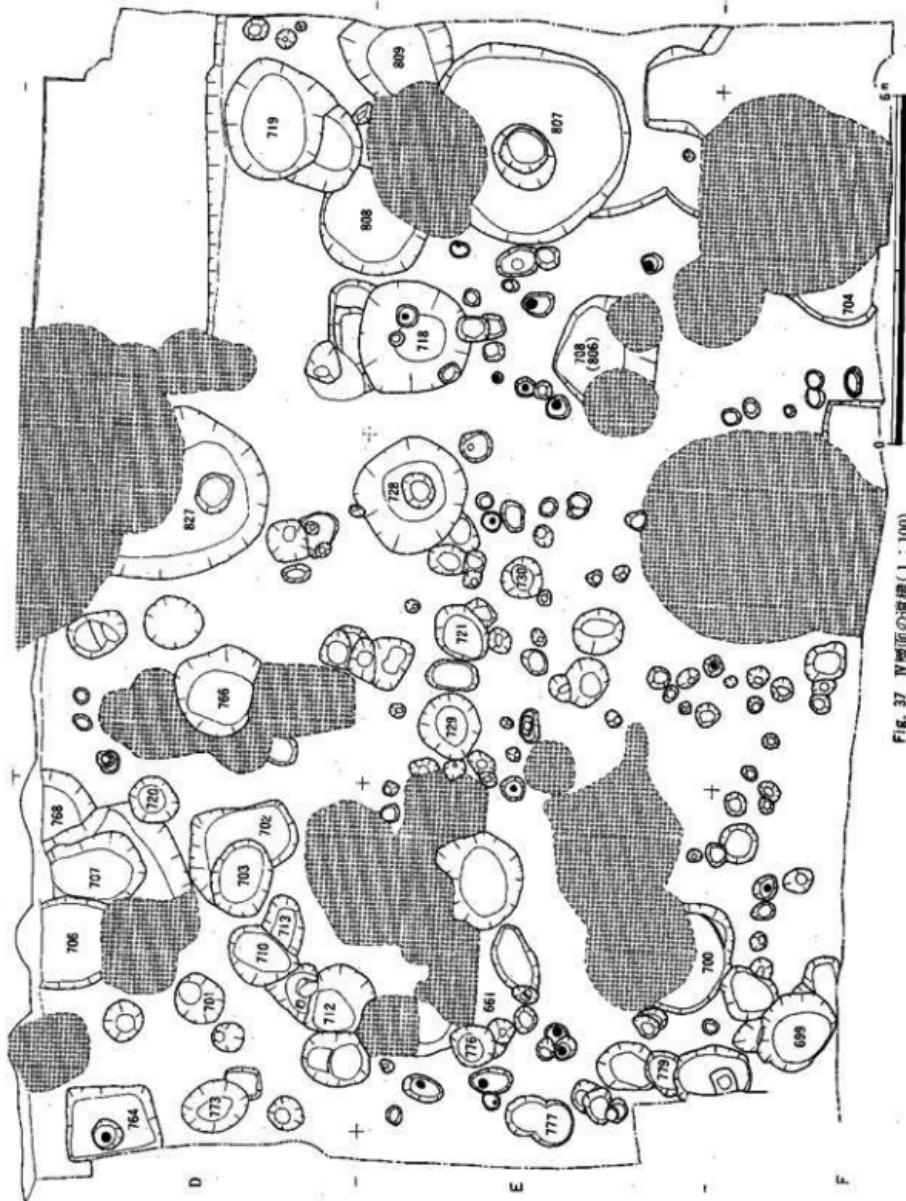
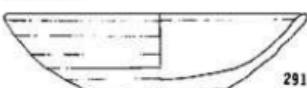


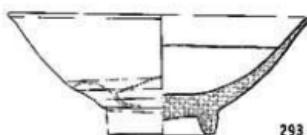
FIG. 37 下側面の組織 (1 : 100)



699号土塙



291



292

293

703号土塙



262



266



269



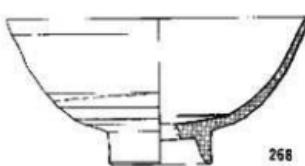
267



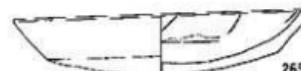
270



264



268



265

Fig. 38 699号・703号土塙出土遺物(1:3)



15cm

IVb層

調査区西辺に沿い、整地というよりはむしろ、基段の造成を行なったような状態の堆積が観察された。これをIVb層とした。IVb層は3部層に分けることができる。最上位のIVb1層は、暗灰色の砂混り土と白色砂との互層である。IVb2層は暗灰色の砂混り土だけである層とみえる。

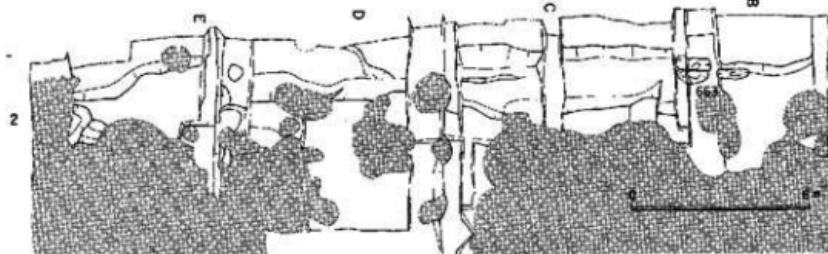


Fig. 39 IVb3層下の状況(1:200)

IVb3層はIVb1層に似て暗灰色の砂混り土と白色砂との互層であるが、間にレンズ状に灰の層が認められた。IVb2層に比べIVb1層、IVb3層から出土する遺物は、はるかに細片が多く、特にIVb3層ではその傾向が顕著である。人工的に叩き締められた結果を示すものであろうか。

IVb3層を除去したところ、図示するような溝状の窪みを認めた。あるいはIVb層造成時の事前の掘込みなのかも知れないが、やや不規則な点疑問が残る。この窪みは後の301号溝、901号溝と走向が一致する。遺物は、陶磁器の量比が大きく、なかでも白磁碗が顕著で、青磁はわずかにみられるのみである。土師器壺・皿もみられるが、底部糸切によるものである。

IV層の遺構

IV層除去の過程で検出した遺構である。III層面を掘込み面としたものも含まれていると思わ



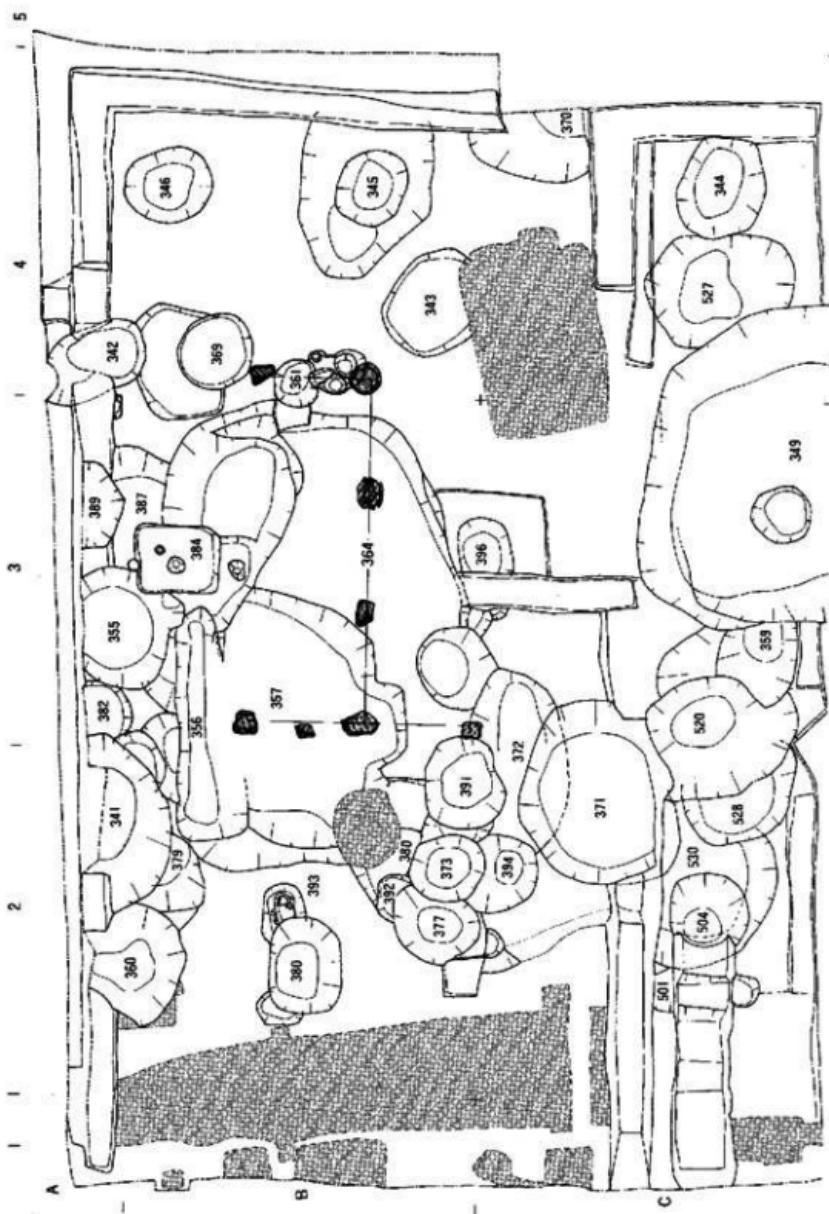
Fig. 40 IV層の遺構(東から)

れるが、確認が難しく、掘り下げ途中での調査となつた。台帳上75基を数える。その多くは、性格は分らないが大小の土塙である。井戸も検出された。上部では建物礎石が遺存した。出土する遺物は、糸切底の土師器壺・皿に白磁、加えて青磁、大形の陶器類という組合せが一般的である。

359号土塙 楕円形の土塙で、長さ1.5m以上、幅1.3m、深さ1.2mを測る。その上部から大



Fig. 41 359号土塙遺物出土状況(東から)



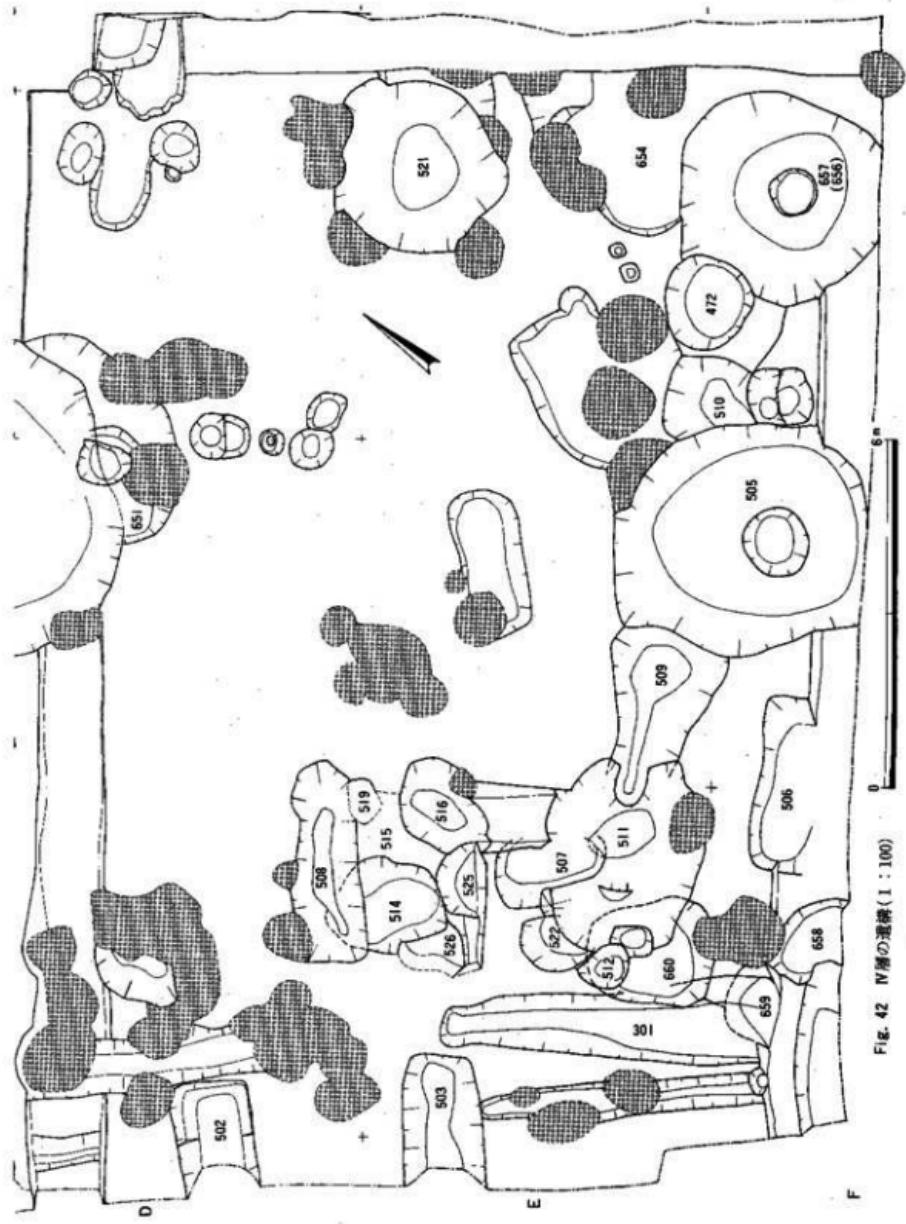


Fig. 42 N 層の遺傳(1 : 100)

形の陶器を主として遺物が一括投棄された状態で出土した。遺物の量はコンテナ20箱余りで、そのうち90%が壺・甕等の大形陶磁器の破片であるが、全形のわかるまで接合復原できた資料は殆どない。破損してのち集積投棄された状況が窺える。土師器は口径15.5cm程の壺、8.5cm程の皿とが少數だが出土した。白磁碗・皿の他に同安窯系青磁碗等も出土した。

357号土塙 大規模で不整な四辺形状を呈す。

底面は部分的に深いところがあり、土取り跡のような状態を呈す。長さ7.9m、幅4.7m、深さは最深部で1.6mを測る。覆土は灰、砂の薄層を挟んで、遺構北辺の深まりへ流れ込むような状況がみられる。

遺物はコンテナ14箱が出土した。すべて覆土中からの出土である。土師器がうち50%、大小の輸入陶磁器が30%の割合を占めている。

土師器は口径13cmを前後する壺(278~281)

と口径9cmを前後する皿(274~277)とがある。前者は64、後者は129の個体をそれぞれ数えることができた。白磁(282~285)には、見込み部の釉を輪状に掻き取る碗(285)、口禿の皿(282)がある。青磁碗(286~288)には別に鍋のない蓮弁をもつ碗破片がある。289は陶器碗、290は青磁碗皿で口禿、見込み部に印花文を施す。



Fig. 43 357号土塙(南から)

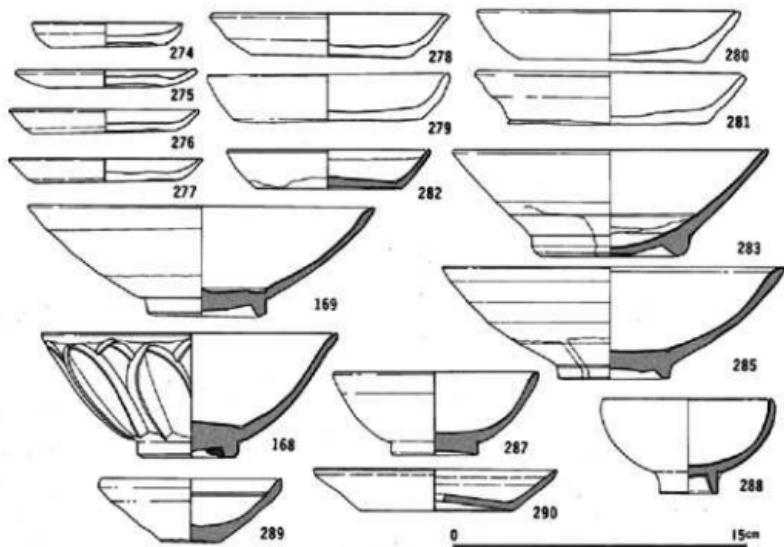


Fig. 44 357号出土遺物(1:3)

364号建物 357号土塙の上位、IV層上部の遺構である。III層面直下、鉄滓を混じえる焼土層に覆われて遺存していた。現状で2間×3間分の範囲に礎石が、部分的に遺存する。礎石6、抜き跡1を確認した。礎石は枕大かそれ以上の亞角砾を使用、一部分割もして使用している。石質は、砂岩及び砂砾岩である。柱間隔は、礎石中心間の距離で最大202cm、最小186cmを測るが、既ね195cmを前後する。礎石は東へ高くなる。地下鉄路線内店屋町工区A調査区検出の礎石列（福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集76頁、1984）と0.5m足らずの高度差で、柱間隔が同一であることから、同一生活面上の建物であったことが考えられよう。

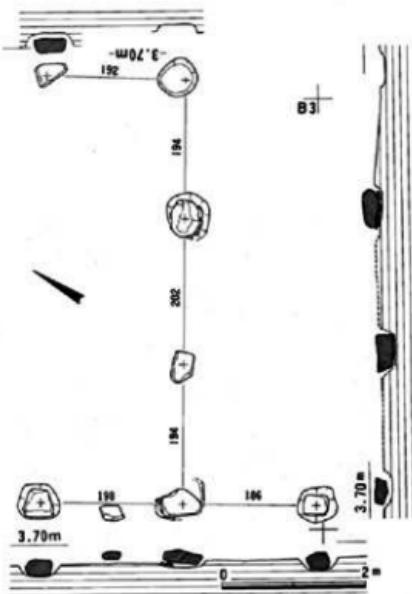


Fig. 45 364号建物(1:80) 柱間隔の単位はcm



Fig. 46 III層面の遺構(北から)

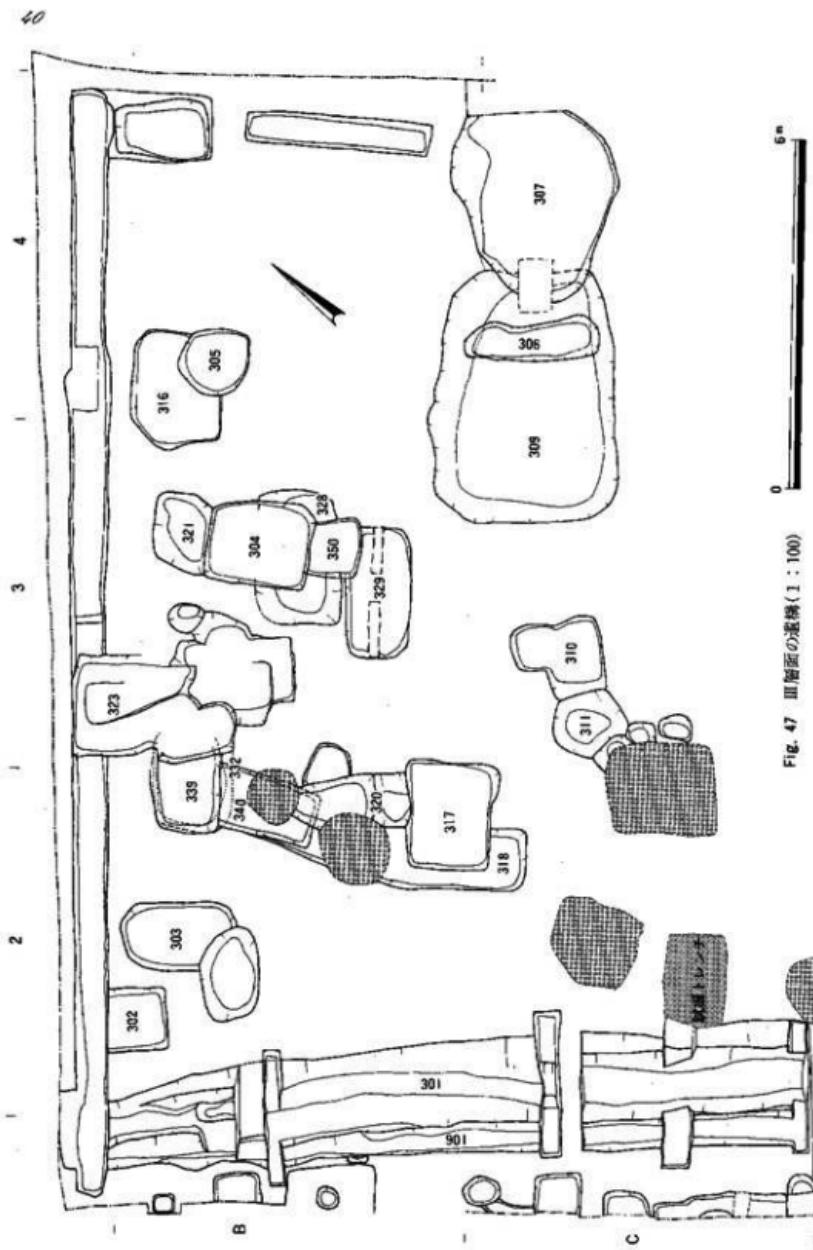


Fig. 47 III管面の造様(1 : 100)

III 層面の遺構

近世墓地の営まれた SW区では確認できなかった。遺構は台帳上36基を数え、土塙に加え溝2条を検出した。明染付、李朝陶磁が遺物に加わる。

301号・901号溝 調査区西辺部を南北方向に走る溝である。301号は最大幅1.5m、断面逆台形状を呈し、深さ0.5mを測る。901号はそれより新しい溝で、底面が0.2m程高い位置にあり、幅0.6m、断面低い逆台形状を呈し、深さ0.2mを測る。301号に接して西側を走っている。SW区ではIV層調査時に下部を確認その平面図中に示した。遺物はコンテナにして8箱が出土し、土師器ほかの国産土器が80%を占める。この溝を中心とした区域で朝鮮陶磁器が出土したが、これについては後述される(付編)。

309号土塙 溝丸の長方形で長さ4.4m、幅3.1m、断面深皿状で深さ0.4mを測る。覆土は黒色の砂混り粘土で、土師器を主とした遺物が大小の罐とともに投入された状態で出土した。出土した土師器壺・皿には、穿孔して紐をかけた痕跡の明瞭な資料があり、本遺構の性格をうかがわせる。遺物はコンテナに9箱程の量で、うち70%が土師器であり、口径12cmを前後する壺144個体、口径7.5cmを前後する皿66個体を識別することができた。この範疇からはずれて大形あるいは小形の資料がある。他に瀬戸瓶と思われる陶器肩部破片が出土している。



Fig. 48 901・301号溝(南から)

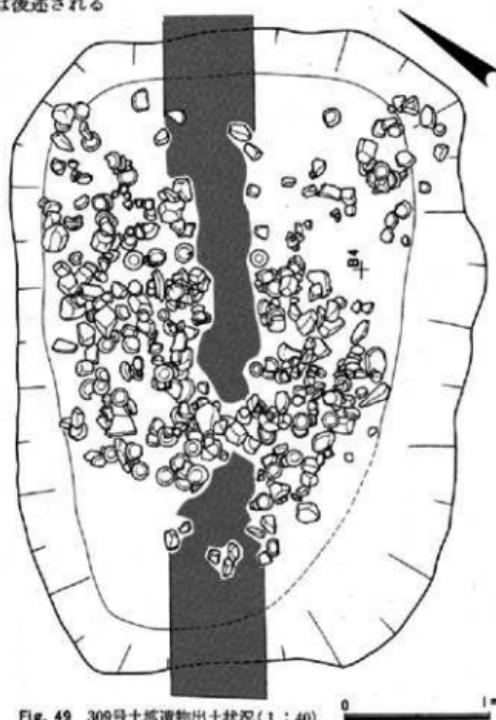


Fig. 49 309号土塙遺物出土状況(1:40)

342号土塗 NW区北辺トレンチで確認した。平面形は橢円形状で、長さ1.9m、幅1.1m、断面高い逆台形状を呈し、深さ0.6mを測る。覆土中に遺物が一括投棄されたような状態がみられた。遺物総量は、コンテナ1箱程度で、その70%が土師器、20%が青磁・白磁である。土師器は糸切底であり、口径12cmを前後する皿と8.5cmを前後する皿とがある。前者9、後者18の個体を確認した。15・232・26は口禿の白磁皿で、他に2個体の破片がある。口径に、図示した資料のような3者がある。21は口禿の白磁碗、23・18は青磁碗で、23の見込部には花文の印花文が施される。他に、図示しないが、短頸壺が出土している。その中には骨が収められていた。

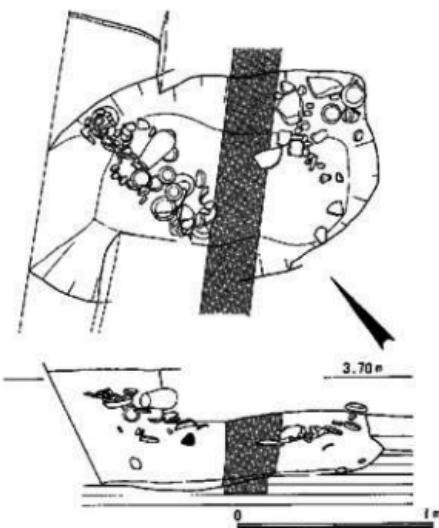


Fig. 50 342号土塗遺物出土状況(1:30)

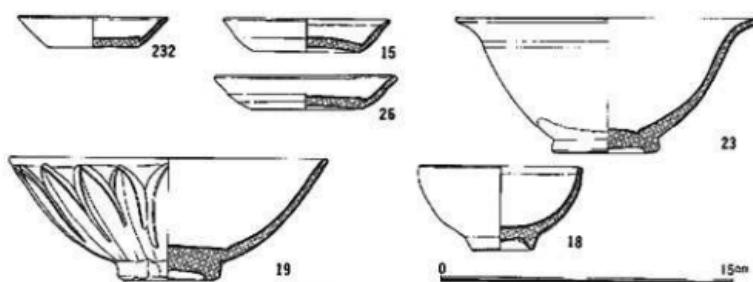


Fig. 51 342号土塗出土遺物(1:3)

近世墓地

E区及びSW区の範囲に広がる。検出できたものは約280基で、原状の墓地の範囲を越えて東及び西へ広がる。墓地の営まれた年代については、発掘出土の墓碑銘に宝曆9年(1759年)とあるのが唯一資料であるが、この時期の墓地に相当するかは不明である。ただ墓塗の深さが大きく異なり調査開始面より上位にあるものから、これより2.4m低いものまで様々である。又、埋葬形式が多様でありかつ重複関係がみられることから、江戸時代中頃以降から継続的に利用されて来たことが考えられよう。

IV. 第21次調査区の概要

博多遺跡群第21次調査

区は、市内博多区駅前3丁目に位置する。今次調査は、ビル建設に先立つもので、調査対象面積250m²のうち、周囲への安全対策上実施面積を150m²として、1983年5月7日から同6月20日までの期間で行なった。調査はま

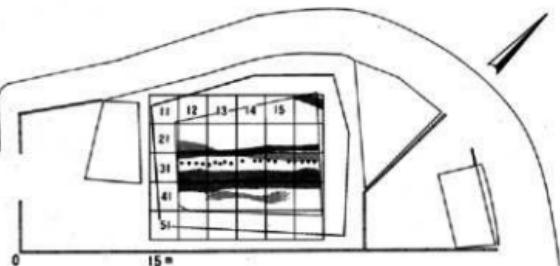


Fig. 52 21次調査区(1 : 600)

ず、機力により現地表下1.5mまでの擾乱層及び中世の遺物を含んだ黒褐色粘質土(I層)を除去したのち、清掃遺構検出を行なった。この最初の調査面をI面とする。I面の調査後、II層を掘り下げ地山砂丘の面での調査を行なった。この面をII面とする。ところでII層は、調査区東半部で顕著な落ち込みに堆積しており、そこでの観察から4部層に分けることができた。最上部は当初からII層としていた暗茶褐色砂層である。次いでIIb層は暗灰色の粘土混り砂層でこの部分のみに分布する。後述するように、奈良時代の遺物が出土した。IIc層は調査区全体に分布する黒色砂層で、古墳時代前期の遺物が出土する。IId層は地山砂丘面の生痕の顕著な部分で、下位白色砂層へ漸移する。以下、II面の遺構から概要を記す。

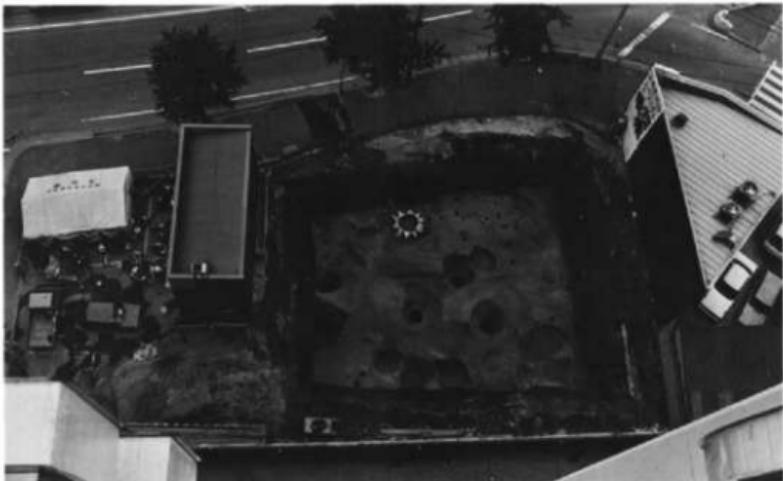


Fig. 53 21次調査区全景(II面の遺構)南から

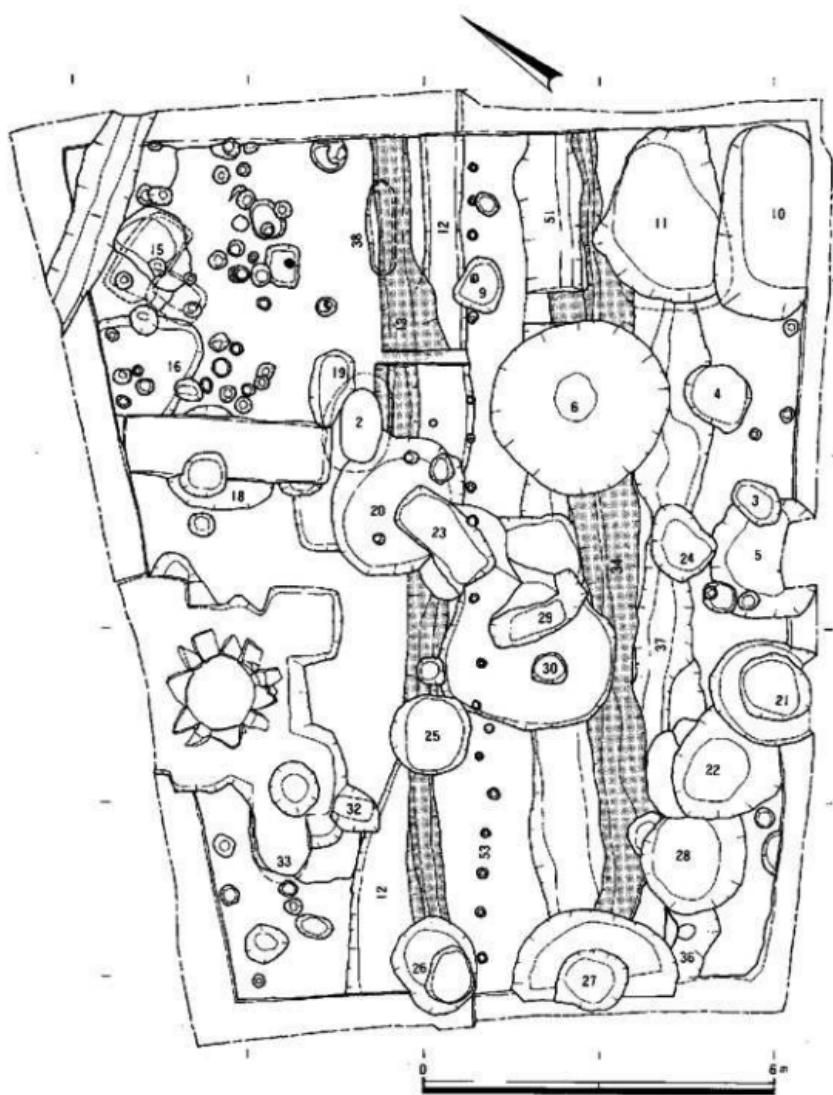


Fig. 54 21次調査区の構造(1 : 100)

II面の遺構

II層面で検出した遺構は、土塙3基と小穴の他は、形状不整のもの2基がある。

43号遺構 調査区西北隅部で黒褐色砂中から土師器が大量に出土した。住居址その他の遺構である可能性を考えて調査を進めたが、明確には捉えられなかった。深さ0.3~0.4mを測る部分もある。土師器には甕・高環がみられ、古墳時代前期のものである。

42号土塙 四角長方形を呈する土塙で、長さ1.6m、幅0.9m断面低い台形状を呈して深さ0.2mを測る。覆土中より須恵器蓋坏の坏部、蓋部が各1点づつ出土した。いずれも完存しており、前者の口径11.1cm、後者のそれ14.2cmを測る。6世紀後半の年代が考えられよう。**41号土塙** が本遺構に重複して新らしい。42号と同様覆土は暗茶褐色砂である。遺物の出土はない。
IIb層出土遺物 IIb層は粘土混りで、窪地の水成堆積物と考えられる。軒丸瓦が出土している。瓦当部で、瓦当面の劣化が遺存している。瓦当面復原径16.2cmを測る。いわゆる渦巻き縞形式の瓦である。

I面の遺構

I面では、小穴以外に溝・井戸・土塙等35基を検出した。

井戸 近世から現代に至る6号・27号・31号、糸切底の土師器を出土し、擂鉢形の掘形をもつ20号・30号、糸切底の土師器皿、高台付土師器碗の出土する21号がある。20号・30号は井戸側に桶を利用するが、21号にはその痕跡のものが残るのみである。20号には、四角長方形の23号土塙が掘り込まれ、井戸側の抜き取りが行なわれているようである。

土塙 形状、規模とも多様である。5号・23号は井戸とも見えるが、覆土に、灰層を挟んだ層がレンズ状に堆積している。瓦器、高台付の土師器碗が出土している。35号は、四角長方形を呈し、底部近くに丸木で留めた横板を巡らせ廻い状の施設を設けている。その本質はいずれも炭化し、覆土にも木炭、灰の層がみられる。瓦器、高台付の土師器碗を出土した。38号はII面で検出したが、掘込面は上位にあると思われる。平面長楕円形状を呈して長さ1.6m、幅0.5m、断面深皿状を呈して深さ0.1mを測る。底面から白磁合子が出土した。土塙基であろうか。

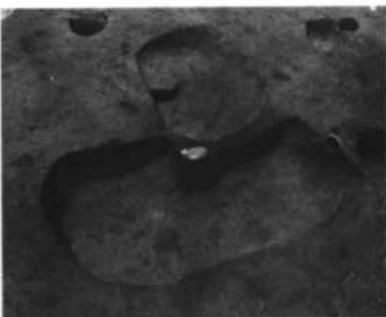
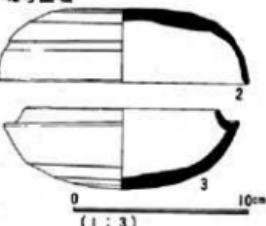


Fig. 55 42号土塙(東から)

42号土塙



II層

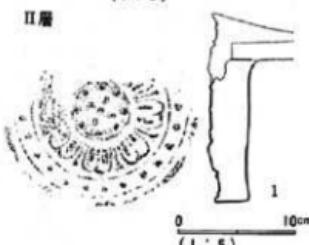


Fig. 56 21次調査区出土遺物

(1:5)

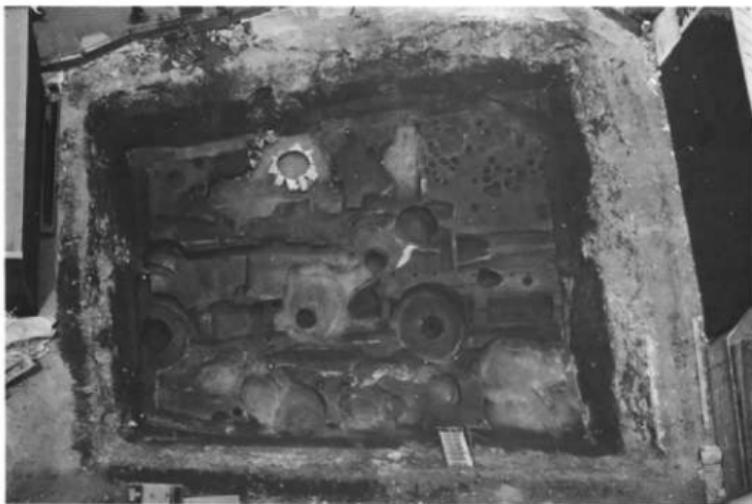


Fig. 57 1面の遺構(南から)

溝 重複関係を模式化し Fig. 59 に示す。それぞれの出土遺物からみるならば、糸切底の土師器を出土する 1 号・13 号・34 号・51 号を挙げられる。また、12 号は竪切底壺を、37 号は瓦器碗を出土する。溝底の高さからいえば、12 号と 13 号、34 号と 51 号・37 号が近似する。これらは平面上でもそれぞれ相接するように流れの溝である。以下各々の要目を記す。1 号は幅 0.8m、断面逆台形で走向は N76°E である。以下同様に 12 号は幅 0.6m、断面浅い U 字形状で深さ 0.2m、走行 N57°E。34 号は幅 1.5m、断面逆台形で深さ 0.7m、走行 N54°E。51 号は幅 1.0m、断面逆台形で深さ 0.6m、走行 52°E。37 号は幅 1.0m、断面逆台形で深さ 0.4m、走行 N57°E となる。これらの溝と、20 号及び 30 号井戸の掘削、使用される時期を隔てて、平面での見かけ上平行する 53 号杭列がある。又、現代の溝も重なって同方向に走る。何らかの、継続する規格性がみてとれよう。



Fig. 58 溝(37-34-51-12-13号)東から



Fig. 59 遺構(溝)模式図

付編

博多遺跡群出土の朝鮮陶磁器

—17・20・22次調査より—

吉岡 実祐

博多は古くから、対外交渉の港として栄え、すでに759年にはその名が『続日本紀』に見出される。以降、大宰府の外港の役割をはたし「大宰府博多津」と称され、時代によって「那ノ津」「冷泉ノ津」「袖ノ港」などと呼ばれてきた。この貿易港としての性格から、旧博多区域の地下には、中世都市の諸様相を留める遺構が多く残されている。このため遺跡からは、中国産を主体とした朝鮮・安南などの陶磁器が多数出土する。今回の調査は、連歌師飯尾宗祇の『筑紫道記』で知られる、浄土宗「竜宮寺」を中心とする祇園・冷泉町一帯の区域で行なわれた。

筆者は從来より、東北アジア交流史の一環として朝鮮陶磁器の起源論とともに、その生産と流通の問題に取り組んできた。だが最近まで資料の不足から、推測の段階に留まざるを得なかった。だが今回、博多遺跡群の調査に参加することによって、博多に移入された朝鮮陶磁器について、ある程度の把握が可能になった。この結果、高麗青磁の起源論とともに、日本の唐津陶器を李朝陶磁器と比較することによって、その出現時期についての新たな見解が出来るようになった。なお、朝鮮陶磁器の鑑定には、韓国の鄭良謨氏（慶州博物館長）・尹龍二氏（圓光大学校助教授）の援助を頂いた。また福岡市教育委員会・折尾学・柳沢一男・杉山富雄氏等には、多くの便宜を計って頂いた。

朝鮮陶磁器の分類

博多遺跡群から出土する朝鮮陶磁器は、時期的には高麗青磁から李朝の粉粧沙器（粉引・堅手）まで幅広い。種類別では、高麗青磁素文4個、象嵌青磁6個。また李朝では、象嵌粉粧沙器5個、粉青沙器（三島手）15個、刷毛目9個、粉粧沙器22個、白磁14個の計75個である。17・20次遺跡は、遺構に山博多駅による破壊があることと、竜宮寺から南へ400m程内地側へ離れているせいか、遺物は10点前後と少ない。出土品の大部分は、22次（山天福寺）遺跡からの出土である。なお朝鮮陶磁器の編年については、古くは浅川伯教・奥平武彦氏等、最近では崔淳南・鄭良謨・西谷正氏等が行なっている。本稿では、これらの編年を踏まえて分類を行なう。遺物の詳細は、分類表に集成した。

出土遺物の形態

1～4は高麗青磁の素文である。1・2の碗は、全面に施釉された蛇目高台である。高台の盤付面のみ釉がふき取られ、鉄足化して赤褐色を呈する。釉調は浅緑色をなし、体部がやや脹らむ。口痕は、骨付に耐火度がわざかに残る。2の碗は、1に比べて高台の幅が狭くなり、内面頂部に「彦」の文字が陰刻されている。3の碗は、釉調がやや暗緑色を呈し、体部の厚みが増している。輪高台の口痕は土の荒い混ぜ目である。4の碗は、ややオリーブがかった暗灰緑

色を呈する。体部表面は、火力不足の為か、斑釉になっている。高台の部分は竹ノ節状で、疊付面は幅に変化があって三ヶ月状になっている。

5～10の象嵌青磁は、7を除いて白・黒の象嵌である。5の瓶は、残された上部から白土による一条の線と、斜めの平行線が巡る。その下に白土による円の中に黒土を施された連珠文が巡る。6の瓶は、白土の平行線。8の鉢には、白土による三本の平行線に黒土による象嵌が部分的に残る。9の破片は、表面に白土による平行線・平行斜線・直角平行線など、内面は白・黒土による乱線である。10は、一面に黒・白土による千鳥状をなす。

11・12は、暗灰緑色の釉調を呈する象嵌粉青沙器である。2個とも碗と考えられるが、白土による印花文と同質の連珠文や、菊花文が象嵌されている。

13～21は粉青沙器、いわゆる三島手である。13は碗と思われるが、灰色釉の屈曲する体部に、見込みと高台部分を除いて全体に白土化粧を施している。外面は繩彫文、内面は上方に平行草文と繩彫文、無地の見込みには白象嵌で、「金海」の文字が一部残る。14の碗は、外面は暗灰色釉の上に白土によって唐草状の文様が荒いタッチで描かれ、内面は白化粧に小さな印花を施している。だが火力不足の為か、内面は白陶化している。高台内面は頂部に押痕が残り、白土が部分的に付着する。15は碗と思われるが、体部に縁のある荒い白土の圓線文が重なる。16の碗は灰色釉の上から、外面は白土によって荒いタッチで傾斜平行線が描かれ、部分的に刷毛目が残る。内面は全面を白化粧して、平行した連続縦線が巡る。17・18は鉢と思われるが、文様は平行線と繩彫文からなる。19の瓶の首部は、1本の白推線で区切り、上下に細かい印花文で隙間なく埋めている。20の碗は、内面中央に菊花文が押刻され、周囲と外面上部に小さな菊花文が繩彫文状をなす。21の皿は、幅広に白象嵌された連続圓線文をなす。

22～24は刷毛目である。22の小碗は、いわゆる無地刷毛目で、暗緑灰色釉の上から濃度の薄い白土水に浸して、内面及び外面上部のみに均一の薄白釉を掛けている。23・24の碗は、灰色気味の釉の内外面に部分的な刷毛目を施している。

25～32は粉粧沙器、いわば粉引・堅手などと称される施釉陶器である。25はやや硬質の粉引手筋で、喫茶用としても使えるが、体部の脹らみが足りない。26は典型的な高麗茶碗である。口縁部に2ヶ所、高台に1ヶ所所打ち傷があるが、完形品である。体部はゆるやかに脹らみ、竹ノ節状に削り出された高台は疊付が三ヶ月状をなし、内面は兜巾になっている。見込の茶溜の上には4個の小さな目痕が残っている。さらに体部の一部に、釉の外れた褐色の素地を残して、火向をなす。27～32の皿は無地の施釉で、胎土は精練された白磁に近いものから、やや荒めのものまである。目痕は、上目・混ぜ目・砂目などがある。高台は普通の輪高台から、疊付の内縁が退化して上げ底になるものもある。

33～36は白磁で、33は軟質の帶黃白色をなし、目痕は砂目である。他の白磁は、帶青灰白色の釉調で、目痕は同質の土を使用したのか、剝離痕が大きく残る。目痕の数も、4～8個と差がある。

出土遺物の年代

博多遺跡群出土の朝鮮陶磁器の年代については、研究者によって年代間の違いがあるが、今回は韓国の鄭良謨・尹龍二氏等と検討を加えて、大体の概略を行なった。

1～4の高麗青磁は、10～11世紀代のものと考えている。1～2の高麗青磁は、浅緑色の釉で体部がやや丸く脹らむ。また蛇目高台の幅が狭くなり、とくに2の碗は退化した状態を示す。これに類似するものが、全羅南道康津郡大口面龍雲里付近の窯址から出土している。高麗青磁における蛇目高台の継続時期については、現在でも推測の段階を出ないが、窯址の調査経験から鄭良謨氏は11世紀初頭、尹龍二氏は11世紀中頃と考えられている。筆者については、窯址の調査（表探）から、後期の蛇目高台が割花・陽刻・輪花・押形文等とともに採集されることから、11世紀中頃と考えていた。しかし1980年、龍雲里第10号陶窯址が貯水池の建設に伴ない、韓国国立中央博物館によって発掘され、蛇目高台の青磁と一蓮に「尚藥局」銘の樂通青磁などが出たし、時代を異にする窯址が4基検出されている。また1982年、十郎川遺跡から出土した500点余の越州窯系青磁の一部を、大口面探集の高麗青磁とともに京都大学に胎土分析を依頼した。この結果、高麗青磁の蛇目高台と一緒に採集される陽刻文と同系の皿には、蛍光X線分析の一つであるクラスター方式の分析樹に差異があり、一括採集品が同時期の窯址とする根拠が失なわれた。さらに1983年中国の馮先銘氏から、後期の蛇目高台と一緒に採集した一部の高麗青磁の文様は、中国では12世紀の範疇に入るとの指摘を受けた。このような結果から、高麗青磁における蛇目高台の下限については、11世紀前半、それもかなり前業との感触を得ている。

3の碗については、混ぜ目の目痕に特徴があり、同形のものが龍雲里窯洞などの窯址から出土しており、11世紀頃と推定されている。

4の青磁は、最近まで日本の研究者によって、越州窯系青磁と見なされてきたものである。しかし筆者は、高台の部分が朝鮮独自の竹ノ節状で、脛付面が三ヶ月状をなしていることから、高麗青磁との見解を捨てきれなかった。はたして、近来精力的に陶窯址の調査を行なっている尹龍二氏から、釉調・器形・胎土との比較から、同質の青磁が全羅北道高敞郡雅山面龍溪里窯址から出土しているとの教示を受けた。これは十郎川遺跡出土の青磁片の中に、高麗青磁が存在するとの京都大学による胎土分析とも一致するものである。今後とも、越州窯系青磁について生産地の擬問なものは、さらに胎土分析などの必要を感じる。

5～10の象嵌粉青沙器は、文様の反復と単純化が窺われることから、高麗青磁の衰退期に当る、13～14世紀代のものと考えられる。

11・12の象嵌粉青沙器は、高麗末期から李朝初期の過渡的なものと見られる。

13～21の粉青沙器は、主に15世紀代に焼造されたもので、末期になると文様に刷毛目が加わり単調になる。13の見込には、白象嵌によって「金海」の文字が一部残されている。この碗と同質のものが、慶尚南道金海郡上東面大甘里窯址から出土している。このことから、15～16世紀代に日本に輸入された朝鮮陶磁器の主体は慶尚道で生産されたことを示している。事実、当時の『世宗憲錄』地理志に、慶尚道は朝鮮最大の焼造地で、磁器所37ヶ所・陶器所34ヶ所の計

71ヶ所が存在し、記録とも一致する。

25~32は、粉引・堅手などの施釉陶器で、胎土・器形から大部分が16世紀代の年代に入ると思われる。目痕については、土目・混ぜ目・砂目などがあり、目痕による年代的区分は困難で、実質的には生産地による分類が考えられる。

ところで31の皿などについて、鄭良謨氏から、幾つかの指摘を受けたので述べてゆく。高台盤付面の内縁が退化して、内面高目の器形が高台に近くなるものは、李朝陶器でも17世紀の範囲に入ることである。また26の碗は20次調査の際、隣接するビルの構工事で、江戸期の共伴遺物と一緒に出土したものである。小さな打ち傷があるが、手に丸く收まる胸の張らみなど、喫茶用の茶碗としての条件を整え、粉引手の逸品である。しかし鄭良謨氏は、喫茶用の茶碗としてはあまりにも条件が揃いすぎており、持った感じが他の粉引手茶碗に比較して軽い。従って、日本からの注文品ではないかとの指摘をなさっている。確かにこの茶碗は、打ち傷に見える胎上がやや軟質の赤褐色土で、他の粉引手とは異なる。出土層の違いからも、おそらく釜山地方で焼造された、高麗茶碗と考えられる。

朝鮮陶磁器出土の意義

今回の調査で明らかになった朝鮮陶磁器において、多くの諮詢に専念した問題が見出されたことになった。とくに22次（旧天福寺）の調査では、ほぼ南北に延びる小溝（301号）から、「金海」銘の粉青沙器など良質の遺物が出土し、博多における15世紀代の輸入朝鮮陶磁器の一端を窺い知ることが出来た。さらに遺跡から出土した、最も古い蛇目高台の高麗青磁と、最も新しい李朝の粉粧沙器については、今まで推測の域を出なかった東北アジアの陶磁器交流について、別な見解が出せるようになった。この小論は、今回出土した朝鮮陶磁器を吟味することによって、陶磁器編年問題を、新しい視点から再検討を行なうものである。

高麗青磁の起源について

高麗青磁における起源論については、現在2つの説がある。一つは崔淳雨氏等の説で、新羅土器と高麗青磁の過渡期のものとして、京畿道仁川市北区景西洞の綠青磁を考えられ、後三国時代から高麗王朝が成立する9世紀末から10世紀前葉に高麗青磁が出現した、とされている。他の一つは尾崎渾盛氏の説で、越州黒青磁の完成された時代と、当時の新羅と唐との交流関係から見て、新羅の元聖王12年（796）頃にはすでに焼造が始まり、興德王元年（826）頃には青磁として完成されていたと、推測されている。

この発生問題の擬問を解くため筆者は1977年以降、全羅南道康津郡人口面・七良面に存在する、蛇目高台の青磁窯址30余ヶ所の調査を行ない、次のような作業を試みた。蛇目高台青磁碗の器形変化、素文から劃文・蓮弁文などへの転換、匣鉢に残る窯印の変化と消滅時期、青磁を置く台や抬の変化、並行して残る10基前後の土器窯址、新窯址から見込に「當院」銘のある蛇目高台青磁の採集、そして826年～846年にかけて東北アジアの海上交易を独占した張保皋の清海鎮（莞島）の影響下に存すること。これらの諸々の関連から、1979年の論文で筆者は次のように

な考察を発表した。その要旨は、「816年頃、憲徳王の時代に続発した大災地変によって生活の手段を失った民衆は、流民または奴婢として越州窯のある浙東地方に渡って行った。その数は文献によると、数万人とも想定出来る。その中には、当時下層階級の職業であった陶磁器の製作に従事して、技術を習得した者達がいたと考えられる。その後、唐政府は823年と828年に新羅人奴婢解放令と売買禁止令とを発布している。自由の身になった陶工達は、陶磁器の交易によって利益を得ようとする張保卓の求めに応じて、莞島から10数キロの龍雲里に移住したとも考えられる。その後、張保卓の暗殺によって後援者を失なったため、再び高麗の保護を受けるまで、小規模の窯を維持したと推定される。」

この論文の発表の後で、韓国で幾つかの発見がなされている。新羅土器と高麗青磁とを繋ぐものとされた、仁川景西洞窯址の綠青磁と同質の綠青磁窯址が、昨年李龍熙氏によって大口面龍雲里盜賊窟上方で、蛇目高台の青磁窯址2基とともに発見されている。また先年尹龍二氏は、龍雲里第9号陶窯址の試掘で、割花・蓮弁文の青磁とともに東内洞窯址出土と同形の馬蹄形陶枕(置台)を発掘されている。このような結果から、仁川景西洞窯址の年代については、再考の必要がある。また鄭良謨氏によると、1983年韓国TBSの報道員が、莞島の調査で越州窯青磁を2個採集している。莞島は張保卓の死後、反乱を恐れた新羅政府によって851年末、無人化している。これは、9世紀前葉の交易品としての、越州窯青磁の存在を示すものであろう。

また筆者も1979年8月、慶州聖童寺出土の陶磁器を、調査担当者崔秉鉉氏の御好意で分類を行ない、数万点の破片から、越州窯青磁19個、唐一彩2個、長沙銅官窯1個、邢州窯白磁2個を検出した。だが不可解なことに、越州窯青磁は9世紀代の特徴を示し、それ以降の青磁は見出されない。そのかわりに、蛇目高台の高麗青磁が40個検出されている。これは現在、鄭良謨氏が再調査をなされている、雁鵠池出土の越州窯青磁も同じ傾向を示している。これらの結果によって、最初に焼造された青磁は、まず国内の需要を満たし、日本などへの輸出は特殊な例を除いて、大量に生産されるようになる高麗時代からとも考えられる。

なお越州窯青磁の影響については、日本においても年代間の違いがあり、猪俣窯白瓷陶器の出現については、10世紀前半とする説と9世紀中頃とする説による、論争がなされている。¹¹⁾¹²⁾

唐津陶器の出現について

古唐津の創業については諸説があるが、現在では室町後期の15世紀開窯説に、焦点が絞られつつある。この説は、古唐津を松浦水軍による「倭寇貿易」の一端として捉え、岸岳古窯には北朝鮮公寧地方の、割竹式諸窯の陶技が移入された、との推測をなしている。¹³⁾

しかし今回、博多遺跡から出土した李朝陶磁器は、15~17世紀初頭まで連続しており、古唐津との共存には矛盾を感じる。また、今日までの文献や発掘資料の運用には疑問な点が多い。以下、著者が疑問に思う項目を列記して、後の再検討を待ちたい。

(1) 会寧窯は李朝後期 会寧窯址を発掘なされた浅川伯教氏は、咸鏡北道会寧郡慶頭面細洞第1窯址を、李朝後期となし古唐津に似ると記している。¹⁴⁾また他の会寧軸窯址も、李朝中期・後期・時代不明とある。また割竹式窯は李朝後期まで継続しており、現在も解明されていない。

(2) 松浦水軍による倭寇 16世紀代の松浦水軍は、倭寇から転身して「中継貿易」に努めた。とくに1510年の「三浦の倭寇」以降、対島の宗氏が朝鮮貿易の管理を強め、1544年の慶尚道蛇梁など数件を除いて、倭寇による襲撃・略奪は無くなつた。さらに1572年以降、宗氏の監視の下、交易船は毎年80隻に上り、そのうち松浦一族は10隻前後を占めた。¹⁵⁾

(3) 「肥前產物園工」古唐津の問題は、江戸時代には無く、明治時代後半に茶道の隆盛に伴なって始まる。それゆえに、文禄・慶長の役以前の唐津に関する文献は存在しない。岸岳城の落城による陶工達の逃散、いわゆる「鬼子嶽崩れ」などの言葉は、最近の造語と考えられる。¹⁶⁾

(4) 古唐津の多様性 初期の唐津陶器には種類が多いが、唐津には寺沢氏が隣接した陶工以外にも、関ヶ原の戦で滅んだ小西行長等の茶人大名達が連れ帰った陶工等もいたと思われる。その多くは、船港地たる唐津に取り残されたとも考えられる。

(5) 遺跡出土の唐津陶器 昨年9月、青山学院大学で貿易陶磁研究会が行なわれた。その際、文禄・慶長の役以前の唐津陶器を出土した遺跡の調査担当者に出土状況を伺った。しかし、その多くが相対的なものであった。かえって、1573年以前の一乗谷朝倉氏遺跡、1585年以前の根来寺坊跡などの無人化した遺構からは、唐津陶器は検出されない、とのことであった。¹⁷⁾

(6) 上野・高取窯と古唐津 筆者は1978年、唐津岸岳田屋窯址ならびに高取山田窯址（唐人谷）出土の、粗製白濁長石釉の輪花皿を実測した。驚いたことに、器形ならびに高台内を一周転して削る技法など、同一人物の作かと思われた。このことは、内ヶ磯窯址から班唐津と類似のものが出土することから、寛永年間に焼物師として高取窯に参加した、肥前唐津寺沢家浪人五十嵐次左衛門の存在が指摘出来る。¹⁸⁾

以上のように、唐津陶器の出現には多くの疑問が存在する。今回の博多遺跡群の調査から、17世紀初頭の李朝粉粧沙器が出土したことは、唐津陶器の出現を、文禄・慶長の役以後とする佐藤進三氏の説が考えられる。なお、詳細については、別稿で述べたい。

[註]

- 吉岡光祐「高麗青磁の発生に関する研究」韓国崇田大学校博物館 1979
- 吉岡光祐「越州窯系青磁の形態分類から見た高麗青磁との比較」『十郎川』一
住宅・都市整備公団 1982
- 浅川伯教「朝鮮の窯跡と採集品の記録」『世界陶磁全集』14 李朝 河出書房 1956
- 奥平武彦「開闢講座」李朝 雄山閣 1937
- 佐淳甫「高麗青磁の編年」『世界陶磁全集』18 高麗 小学館 1978
- 鄭良張「李朝青磁の編年」『世界陶磁全集』19 李朝 小学館 1980
- 西谷正「九州・沖縄山上の朝鮮陶磁器に関する予想」『九州文化史研究所紀要第二・八号』 1983
- 清水芳裕・夏科哲男「十郎川遺跡出土高麗青磁の識別(胎土の螢光X線分析)」『十郎川』一
住宅・都市整備公団 1982
- 佐淳甫 前掲5
- 尾崎海雲「高麗青磁の起源に関する問題の考察」『陶說』 1960 1・4・5・6・7月号
- 地崎彰一「窯探窯の編年について」『愛知県古窯跡分布調査(III)尾北地区・三河地区』愛知県教育委員会 1983
- 高島忠平「平成京更三坊人跡東側溝の施釉陶器」『考古学雑誌』 第57巻1号 1971
- 永竹威「古唐津の系譜と造形美」「古著津(肥前朝鮮の歴史と美を探る)」佐賀県立博物館 1983
- 浅川伯教「李朝陶磁跡一覧表」P255『世界陶磁全集』14 李朝 河出書房 1956
- 「朝鮮達使國次之言見釈」『九州史料叢書』九州史料刊行会編 1955
- 中島浩氣原著 水竹威編「肥前陶磁史」P27 名著出版 1955
- 「貿易陶磁研究」No.4 日本貿易陶磁研究会 1984
- 磯村罕男「高取施釉陶係史料調査について」P180『(古高取)内ヶ磯窯跡』直方市教育委員会 1983
- 佐藤進三「唐津陶の種類」「唐津」陶磁叢書第二卷 日本陶磁協会 賀茂社 1947

朝鮮陶磁器一覧

No.	出土地點	形	形	年代	寸法(cm)			釉	胎	燒	特徵
					口徑	最高	高等				
1	22・516号	碗	高足碗底	10C		3.9		帶青瓷綠色	灰白色	良	好
2	22・367号	器	器	10~11C		4.0		淡綠色	灰色	好	外表面土色
3	17・SK248	器	器	11C		5.2		暗綠色	灰褐色	好	目紋土は墨色
4	22・N器	器	器			5.6		帶褐灰綠色	淡褐色	やや良好	表面全体に新斑
5	22・NA4D2区	瓶	器	13~14C				淡綠灰色	灰白色	良	白・墨の象嵌
6	17・SE16中層	器	器					帶青綠暗灰色	灰褐色	好	白
7	22・SD24C-4	器	器	14C				帶青綠暗灰色	灰色	好	白の白裏底
8	17・SK27	(碗)	器					帶青綠暗灰色	灰色	好	白・墨の象嵌
9	22・SD317		器					綠灰色	灰褐色	好	白
10	22・加瀬面B4区		器					器	器	好	白
11	22・460号	碗	深腹碗外側	14~15C	11.0			帶褐暗灰色	灰色	好	白の團結文・連珠文による象嵌
12	22・トレンチ	器	器			13.6		帶褐暗灰色	反毛色	好	白の絵文
13	22・301号	器	矮身沙器	15C				4.6 灰色	秋白色	好	白の草文と連珠文の象嵌 足底に金銅の文字残る
14	22・462号	器	器			6.0		淡灰色	青褐色	不良	内面の白裏底が発生して 文様小片
15	17・SD24	器	器	15~16C				9.8 帶青綠暗灰色	灰色	良	盤全体に移行
16	22・301号	碗	器					5.6 帶青暗灰色	灰白色	好	内面底に平行刷毛目
17	22・SK390	(小鉢)	器	15C	9.2			帶青綠暗灰色	灰褐色	好	外面底に二重の平行刷毛目
18	17・SD24	器	器					器	灰白色	好	白の團結文象嵌
19	22・SK423	瓶	器					帶青灰色	灰色	好	白の印文象嵌
20	22・田河面	碗	器			5.8		帶褐暗灰色	灰白色	好	中央に菊花文
21	22・田河	器	器	15~16C				5.2 帶青暗灰色	青褐色	好	周囲に印文、模擬文象嵌
22	22・306号	小碗	無柄碗内側	16C	10.0	3.6	3.1	帶青綠暗灰色	反毛色	不 良	内底に同心圓状の象嵌
23	22・301号	碗	附足口	16C	12.4	5.2	4.6	帶青暗灰色	灰白色	良	内底一部と外底上部に周いだ 刷毛目
24	22・トレンチ	器	器		13.8	5.8	5.6	帶青暗灰色	青褐色	好	内底上部に内刷毛目
25	22・308号	器	粉 瓶		14.8	7.5	5.6	帶黃白色	白 体	好	内底の目模はかき落し 蓋付の目模はかき落し
26	22・表採	器	器	17C	13.2	6.6	6.0	帶黃白色	淡褐色	好	内外面の妙回底をかき落し 内面に4個
27	17・SD25	器	器	16C	10.8	3.6	4.6	帶青暗灰色	灰色	好	目前は墨色で、内面5個 底面4個
28	17・P572	器	器		9.4	3.9	3.8	暗褐色	器	好	内外面の目模は4個の上見
29	17・佐倉層	器	器					4.6	器	好	内面に妙回底の口底
30	17・SK15	器	器	16~17C				帶青暗灰色	器	好	目前は外側面に4個の上見
31	22・表採	器	器					4.8 帶青暗褐色	淡褐色	好	目前は内外面妙回底の目模
32	22・表採	器	器					4.8 淡褐色	器	好	目前は墨色
33	22・表採	器	白 瓶	15~16C	10.6	3.3	4.6	帶黃白色	白色	好	妙回底
34	22・N器	器	器			12.3	3.3	4.2 帶青暗白色	器	好	目前は同質土の可塑性
35	17・SK220	(碗)	器					5.2 帶青暗色	反毛色	好	目前は内底上の可塑性
36	22・田河底	(底)	器					4.6 帶青暗白色	灰色	好	好

出土地点の17・20・21・22は調査次

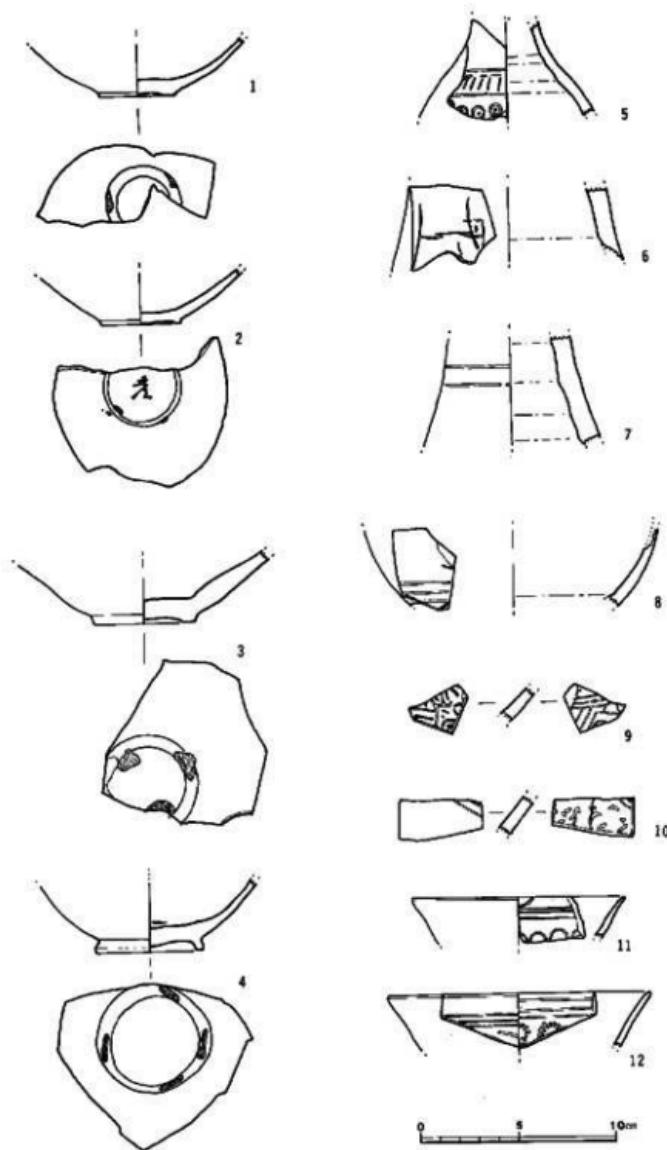


Fig. 60 朝鮮向磁器実測図 (1 : 3)

0 5 10cm

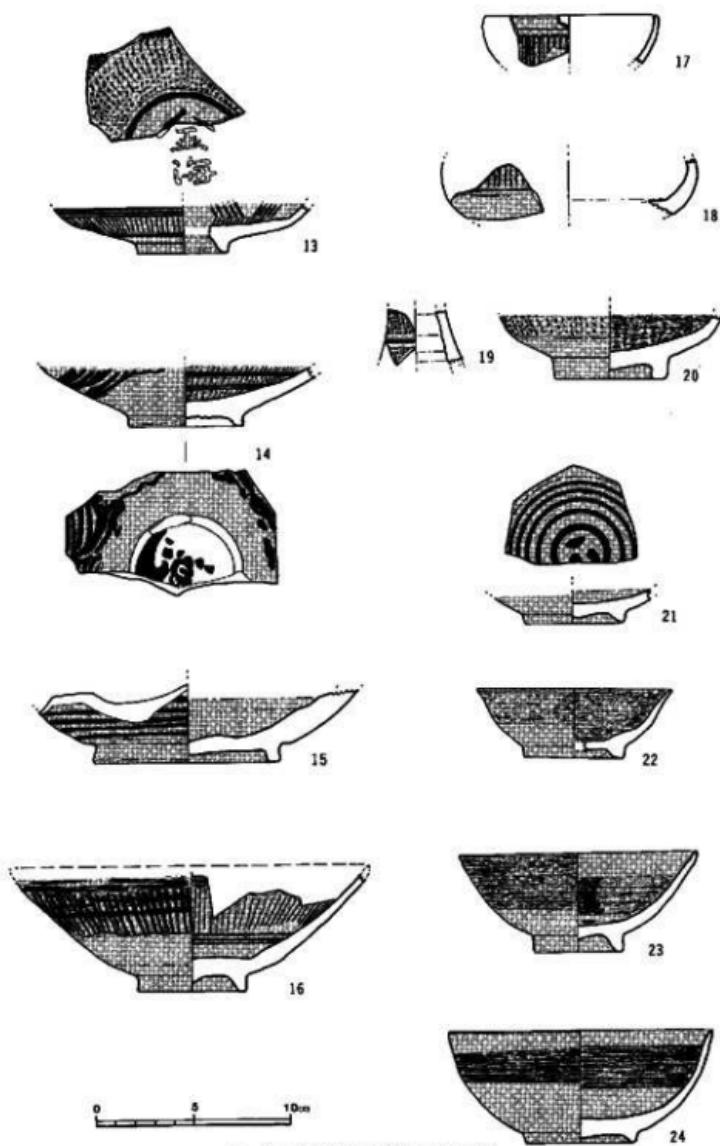


Fig. 61. 韓國高麗器物圖 (1 : 3)

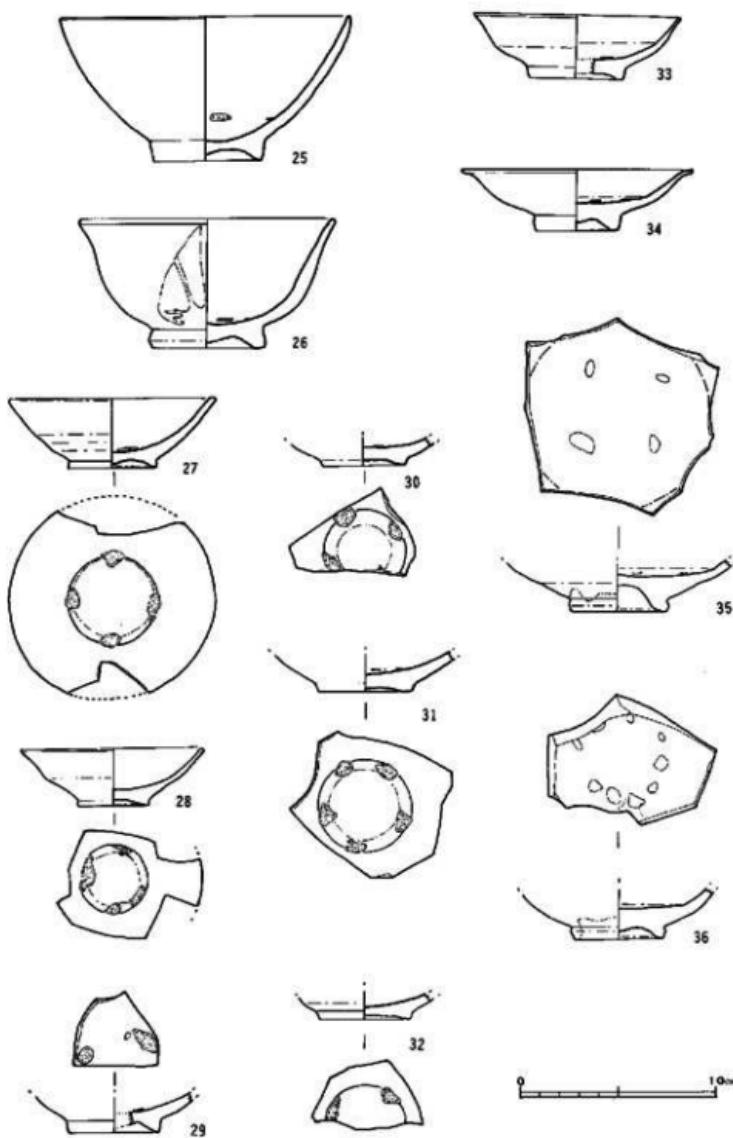


Fig. 62 朝鮮陶磁器実測図III(1:3)

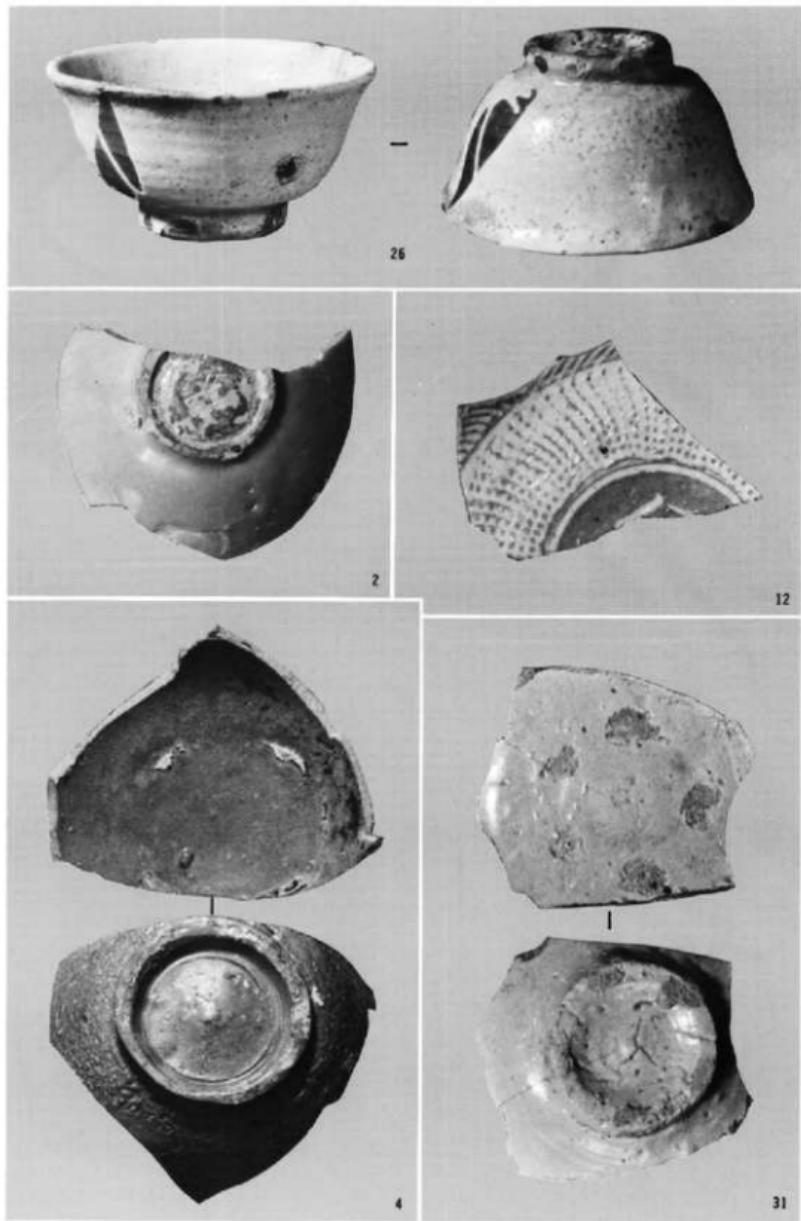


Fig. 63 朝鮮陶磁器 I

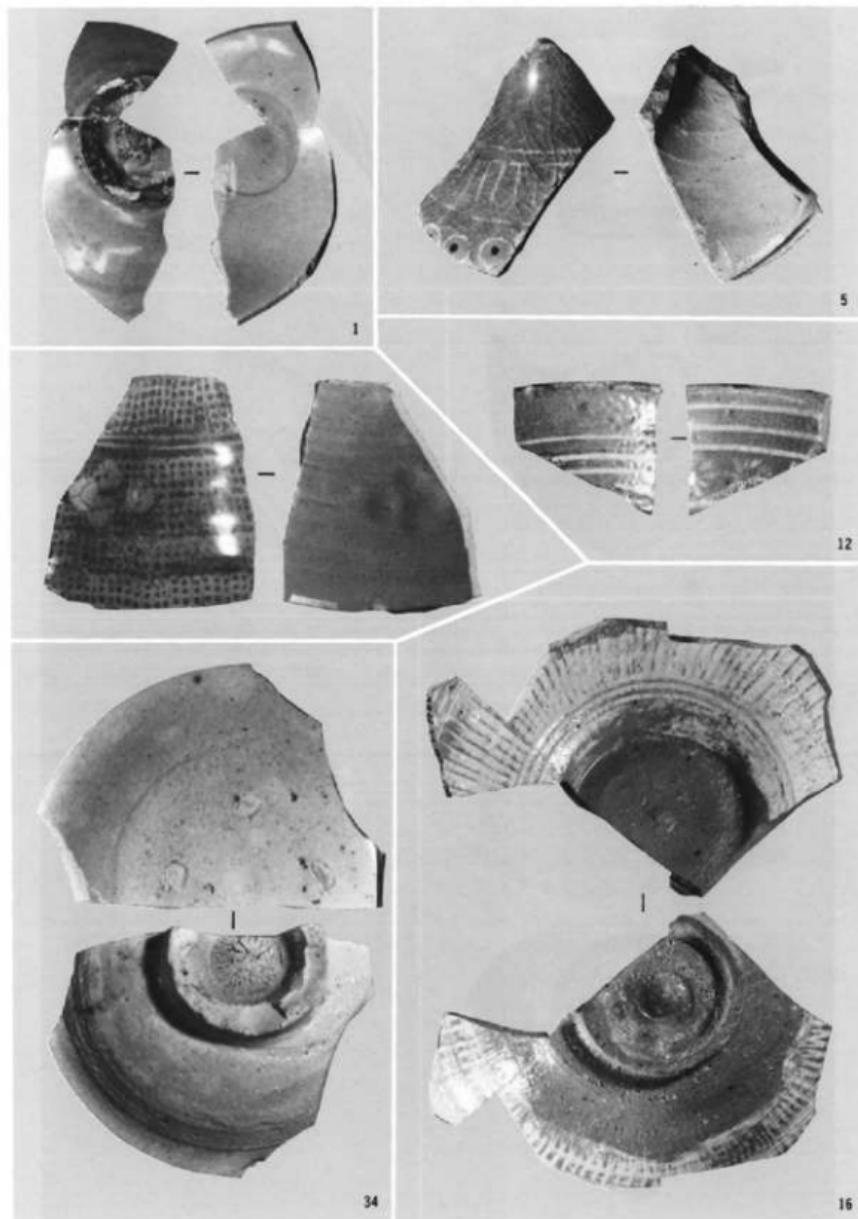


Fig. 64 朝鮮陶磁器II

博多 III

福岡市埋蔵文化財調査報告書第118集

1985年3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 株式会社 チューエツ
